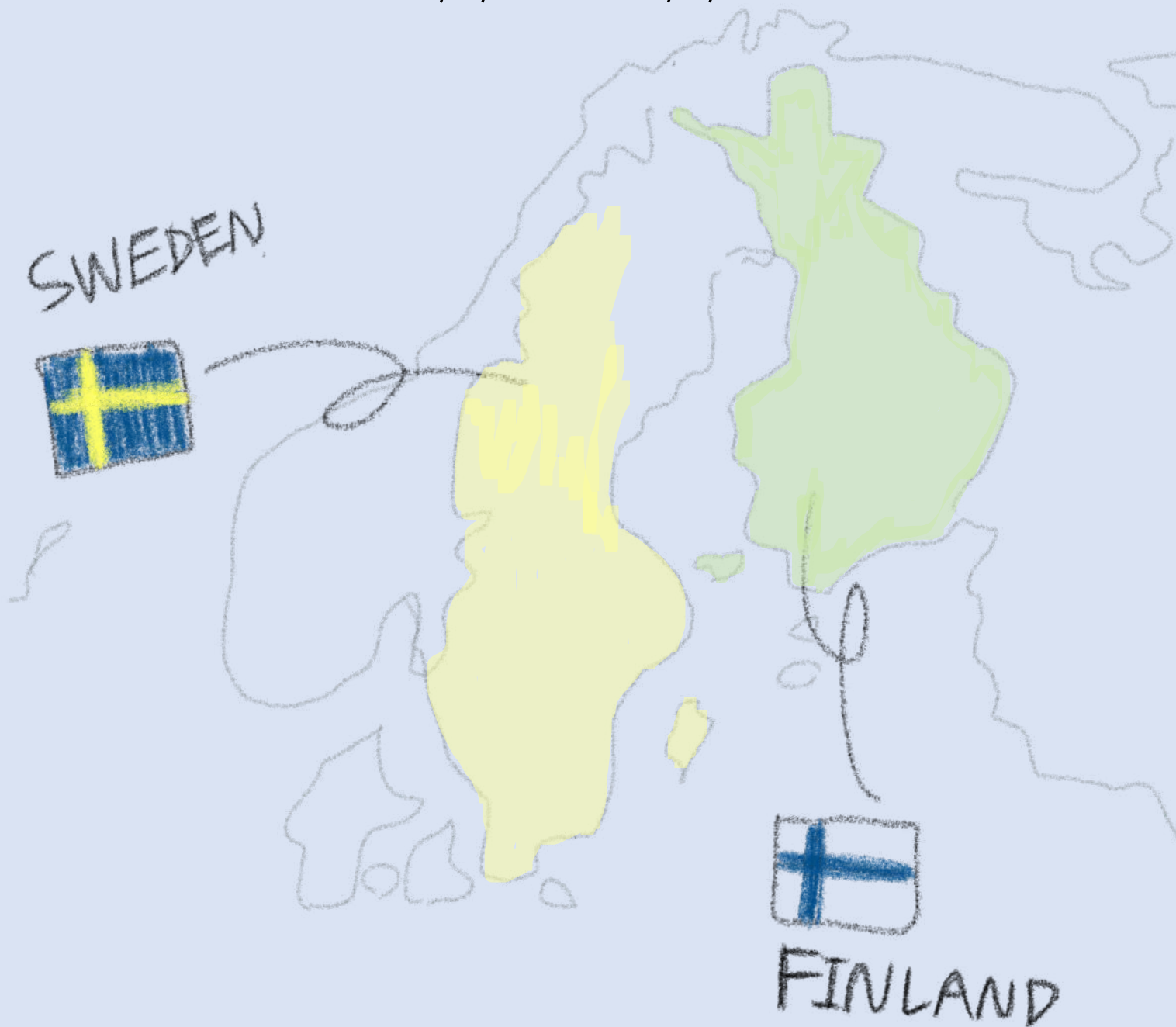


Northern Europe Study Tour

北欧研修 2020

報告書

2020/2/4 – 2020/2/12



聖心女子大学 教育学科

目次

はじめに	3
I. 聖心女子大学教育学科北欧スタディーツアー全日程	4
II. 視察記録	8
Day 1 (2月4日)	8
1-1 旅の始まり	8
Day 2 (2月5日)	9
2-1 トウンバ高校	9
Day 3 (2月6日)	13
3-1 公立シェルプリングス学校	13
3-2 ブロンマ・フォークハイスクール	17
Day 4 (2月7日)	22
4-1 私立ピスリンゲン・ビョーンゴルデン幼稚園	22
4-2 子どもの権利擁護団体(BRIS)	25
4-3 公立グリムスタ基礎学校	28
Day 5 (2月8日)	34
5-1 スカンセン	34
Day 6 (2月9日)	36
6-1 スウェーデンからフィンランドへ	36
Day 7 (2月10日)	37
7-1 エスポー市立リヴスニエミ学校・プリスクール	37
7-2 イソ・オメナ・ネウボラ	45
7-3 イソ・オメナ図書館	51
7-4 オタニエミ高校	57
7-5 アールト大学	61
Day 8 (2月11日)	63
8-1 スタディーツアー最終日	63
III. 個人感想文	64
全ての人に開かれた社会環境	64
差し伸べる手	65
“違うことが当たり前”	66
誰もが求めれば学ぶことのできる世界	67
民主主義社会の実現に向けて教育現場では何ができるか	68
ひとりひとりが輝ける環境作り	69
日本とは違った教育観を感じた9日間	70
全ての人が夢を持つために	71

個性を大切にすゑ教育	72
一人一人に向き合ふ教育.....	73
学びへの価値観が変化した 1 週間.....	74
民主主義と子育ての社会化.....	75
はぐくみ、学び合ふ社会.....	77
おわりに	79

はじめに

聖心女子大学現代教養学部教育学科では、グローバル化下における教育と生涯学習のあり方について探求することを目的とし、授業と関連づけた海外スタディーツアーを学科の事業として行っています。令和元年度は、2019年8月に実施されたSDGsを学ぶナミビアへのスタディーツアー（永田佳之教授と水島尚喜教授が引率）に続き、2020年2月に澤野由紀子教授と杉原真晃准教授の引率のもと、スウェーデンとフィンランドにおいて、難民・移民、障害者、性的マイノリティー等への差別を認めない平等な教育機会を保障する北欧型インクルーシブ教育と生涯学習を学ぶスタディーツアーを実施しました。本報告書は、2020年2月4日から12日までの9日間のスウェーデンとフィンランドにおける学生の研修の記録です。

2月4日の出発時、日本では新型コロナウイルス感染症の患者が発生した大型クルーズ船をどこに寄港させるかが大きなニュースとなっており、成田空港からヘルシンキまでの飛行機の中では皆マスクを着用して細心の注意を払っていました。スウェーデン、フィンランドともに、この時点では武漢からの観光客1名のウイルス感染が確認されていただけでしたので、幼稚園や学校への訪問には何も支障はありませんでした。しかしながら、私たちが帰国してから約1ヶ月の間に、北欧諸国でも自国民の間に感染者が急増し、教育機関では外国からの訪問者の受け入れは禁止となりました。出入国の制限も始まり、スウェーデンで訪問したTumba高校では日本語専攻の学生が4月に予定していた来日と高校体験入学が延期されました。

スウェーデンでは3月から全国ですべての高校と大学がオンライン授業に移行したものの、幼稚園と基礎学校（初等・前期中等教育）は通常通り授業を継続していました。一方、フィンランドでは私たちが訪問したエスポー市を含む首都圏がロックダウンとなり、学校・大学はすべて在宅でのオンライン学習となりました。同じ北欧でも対応には国によって違いがみられますが、北欧諸国に共通しているのは、教育を受ける権利と生存権を中心に子どもの権利が大切にされている点です。このことは、今回のスタディーツアーの際のすべての訪問先で確認することができました。

数ヶ月の間に世界は信じられないほど大きく変わり、これまでのような海外での教育視察やフィールドワークが再開できるまでにはかなりの時間が必要となりそうです。その意味でも、今回のスタディーツアーは貴重な経験となりました。

私たちが歓待してくださったスウェーデンとフィンランドの先生方や子どもたち、現地調査と通訳ガイドでお世話になったSwedish Quality Careのエーミル・オストベリ氏、旅行手配をいただいたツムラーレ/北欧トラベルの河村信吾氏に心より感謝申し上げます。スタディーツアーの実施にご協力いただきました聖心女子大学学長様はじめ教職員の皆様にも御礼申し上げます。

2020年5月5日

北欧スタディーツアー参加者一同

I. 聖心女子大学教育学科北欧スタディーツアー全日程

(1) 事前学習会

12月 5日(木) 12:30-13:20 メンバー紹介、スタディーツアーの目的とスケジュール確認

12月 12日(木) 12:30-13:20 スウェーデンとフィンランドの教育制度について

冬休みの課題：「北欧モデル」に関する考察と現地調査の目的の明確化

1月 9日(木) 12:30-13:20 北欧型インクルーシブ教育について

1月 16日(木) 12:30-13:20 ツムラーレ河村さんより現地視察日程の確認と旅の注意について

1月 24日(金) 11:30-14:00 トウンバ高校におけるワークショップの準備

(2) 現地視察

月日	スケジュール
2月4日 (火曜日)	9:30 成田空港第2ターミナルIカウンター前集合 11:55 成田発 AY074 15:10 ヘルシンキ着 16:50 ヘルシンキ発 AY835 17:00 ストックホルム・ブロンマ空港着 ガイド付き専用バスでホテルへ 18:00 ホテル (Scandic Star Sollentuna) チェックイン 18:30-20:00 ショッピングモール散策・各自夕食 20:00-21:00 Tumba 高校でのワークショップ準備、スケジュール確認
2月5日 (水曜日)	6:30-7:15 各自朝食 7:25 ホテル・ロビー集合、徒歩で駅へ 7:36 Sollentuna 駅より Pendeltag 40 にて Tumba へ 8:20 Tumba 駅到着予定 8:30 トウンバ高校 (Tumba Gymnasium) 到着 住所 Utbildningsvägen 2, 147 40 Tumba 担当 アールベリエル松井久子先生 https://tumbagymnasium.se/ 8:40-9:35 2年生日本語授業 9:50-10:40 1年生日本語授業 10:55-11:45? 他の授業見学 英語、数学などの一部分 食堂にて高校生と一緒にランチ 13:00-13:50 日本語入門クラス (5-6人?) 15:00 頃 Tumba 高校訪問終了 16:30 ストックホルム市立図書館 https://biblioteket.stockholm.se/en/bibliotek/stadsbiblioteket

	<p>17:00 シニア・フオークハイスクール (Global Utmaning シニア・コンサルタント Kenneth Abrahamsson 先生のご案内により澤野、杉原のみ)</p> <p>19:00-20:00 各自夕食</p> <p>20:30-21:00 ふりかえりと 6 日の訪問先に関する事前学習</p>
2 月 6 日 (木曜日)	<p>6:30-7:30 各自朝食</p> <p>7:45 ホテル・ロビー集合 Swedish Quality Care エーミル・オストベリさんと専用バスで移動</p> <p>9:00-11:00 公立シェルブリンクス学校(Källbrinksskolan) 住所 Källbrinksvägen 55, Huddinge 担当 Elinor Kennero Tonner 校長 https://www.huddinge.se/kallbrinksskolan 教員用食堂にて昼食</p> <p>12:30-13:40 ガムラスタン王宮周辺～ドロットニングホルム観光</p> <p>14:00-16:00 ブロンマ・フオークハイスクール(Bromma Folkh ögskola) 住所 Åkeshovsvägen 29, Bromma 担当 Kim Thelander 英語教師 https://www.brommafolkhogskola.se/</p> <p>17:00 ホテル到着 自由行動・各自夕食</p> <p>20:30-21:00 ふりかえりと 7 日の訪問先に関する事前学習</p>
2 月 7 日 (金曜日)	<p>6:30-7:15 各自朝食</p> <p>7:30 ホテル・ロビー集合 エーミル・オストベリさんと専用バスで移動</p> <p>8:30-10:10 私立ピスリンゲン・ピョーンゴルデン幼稚園 (Pysslingen Förskolor Björngården) 住所 Ekehjelmstorget 10, Stockholm 担当 Camilla Doeser 園長 https://www.pysslingen.se/bjorngarden/</p> <p>11:00-12:30 子どもの権利擁護団体(BRIS, Barnens rätt i samhället) 住所 Arenavägen 61, Johanneshov 担当 Mikael Dackner 国際コーディネーター Malin Berggren Griffiths カウンセラー https://www.bris.se/#</p> <p>バスの中で移動しながら昼食</p> <p>13:30-16:00 公立グリムスタ基礎学校(Grimsta skolan)と学童保育施設 住所 Kanngjutargränd 12, Vällingby 担当 Marita Svahn 校長 https://grimstaskolan.stockholm.se/</p>

	<p>17:00 ホテル到着</p> <p>17:30 - 21:00 自由時間 ドロットニングガータン～国会議事堂～ガムラスタン散策 ノーベル博物館 https://nobelprizemuseum.se/en/languages/nihongo/</p> <p>各自夕食後、ガムラスタン駅に集合</p> <p>21:30-22:00 ホテルでふりかえり</p>
2月8日 (土曜日)	<p>各自朝食 午前中 オーデン・プランよりバスでユールゴルテン地区へ SKANSEN(野外博物館) https://www.skansen.se/ja (リンショープン大学 Lina Rahm 先生のご案内)</p> <p>午後 自由行動</p> <p>21:30-22:00 ホテルでふりかえり</p>
2月9日 (日曜日)	<p>各自朝食 出発まで自由行動</p> <p>11:00 荷物をもってホテルロビー集合 ガイド付き専用バスでアーランダ空港へ</p> <p>14:35 ストックホルム発 AY810</p> <p>16:35 ヘルシンキ着 (時差1時間)</p> <p>17:30 ホテル(Original Socos Hotel Presidenti)にチェックイン</p> <p>18:00-20:00 自由時間、各自夕食</p> <p>20:30-21:00 翌日の日程確認、事前学習</p>
2月10日 (月曜日)	<p>6:30-7:15 各自朝食</p> <p>7:25 ホテル・ロビー集合、徒歩で駅へ</p> <p>8:00-12:00 エスポー市立リヴィスニエミ学校(Livisniemen koulu) 住所 Arttelikuja 4, 02260 Espoo https://www.espoo.fi/iivisniemenkoulu 担当</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Ms Astrid Kauber エスポー市教育部多文化・言語事業課長による難民・移民の子どもの基礎教育に関する講義 ・ Ms.Leila Tuominen リヴィスニエミ学校・校長による学校の概要とインクルーシブ教育に関する講義 ・ 6年生の児童による学校案内 <p>食堂で児童と一緒に昼食 Fika とふりかえり</p> <p>13:00- エスポー市学習センター(Iso Omena Service Center) 住所 Piispansilta 11, 02230 Espoo https://www.esbo.fi/en-US/City_of_Espoo/Organization_and_contact_information/Contact_information/Customer_Service/Service_Centres/What_is_a_Service_Centre 担当</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Ms. Minna Eväsoja エスポー市保健事業専門家によるネウボラに関する講義 ・ Ms. Anu Miettinen、エスポー市立図書館カスタマーサービスマネージャーによる図書館・メーカースペース等の見学と説明

	<p>15:30- オタニエミン高校 (Otaniemin Lukio) 住所 Tietotie 6, 02150 Espoo 担当 Sinikka Luoma-Mattila 校長、Kristina Erkillä エスポー市国際課専門員のご案内</p> <p>16:00- アールト大学学習センター (Herald Herlin Learning Centre, Aalto University) 住所 Otaniementie 9, 02150 Espoo Kristina Erkillä エスポー市国際課専門員のご案内</p> <p>17:00-20:30 自由時間</p> <p>20:30-21:00 ホテルにてふりかえり 翌日の日程確認</p>
2月11日 (火曜日)	<p>午前 (12:00 までに各自チェックアウト/荷物をフロントにあずける。出発まで自由)</p> <p>14:30 ガイド付きバスで Vantaa 空港へ 17:30 ヘルシンキ発 AY073</p>
2月12日 (水曜日)	<p>10:00 成田空港着 解散</p>

II.視察記録

Day 1（2月4日）

1-1 旅の始まり

2020年2月4日から澤野先生、杉原先生のご引率により、11名の教育学科生が北欧スタディーツアーに参加しました。新型コロナウイルス感染症が流行する中の出国となりましたが、フィンランド・ヘルシンキでの乗り継ぎを経て、無事にスウェーデン・ストックホルムへ到着することができました。今回はフィンランド航空 FIN AIR を利用したため、機内食とともに出てくるペーパーナプキンがフィンランドの有名ファッションブランド・marimekko のデザインで、とても可愛らしかったです。

想像よりも寒くないストックホルムへ到着後は、専用バスで Scandic Star Sollentuna ホテルへ向かいました。ホテル近くには Sollentuna 駅やショッピングモールがあり、夕食はショッピングセンター内のフードコートでとりました。スウェーデンの食事は一人前がとても多いため、シェアしながら食べることをおすすめします。翌日の Tumba 高校でのワークショップについて班ごとに分かれて最終確認をし、スタディーツアー初日を終わりました。（武市亜子）



（成田国際空港での出発前記念写真）



（ヘルシンキーストックホルム間の飛行機）

Day 2 (2月5日)

2-1 トウンバ高校

日時	2020年2月5日(水) 8:40~15:30
訪問場所	トウンバ高校 (Tumba Gymnasium) Utbildningsvägen 2, 147 40 Tumba
訪問先担当者	アールベリエル松井久子先生
視察目的	スウェーデンにある高校を見学することによりスウェーデンの学習環境などを学ぶ。 また、日本語を勉強している高校生とワークショップなどを通して交流を深める。
記録者氏名	品田真優

<スケジュール>

- 8:40~9:40 高校2年生の日本語クラスを見学、ワークショップ (交通機関の影響により到着が遅くなったため実際は10分程の見学となった。)
- 9:50~10:40 高校1年生の日本語クラスを見学、ワークショップ
- 10:45~11:05 美術コースの見学
- 11:15~11:35 ランチ、学校の周りを案内してもらう
- 12:00~12:30 松井先生から学校についてのお話、質問をする
- 12:30~12:50 高校2年生の英語の授業見学
- 13:00~13:20 イントロダクションの数学の授業、様々なクラスの授業を見学
- 13:40~14:50 日本語選択クラスの見学
- 15:00~ 気候クラブの見学

<学校概要>

トウンバ高校はストックホルムから南に25キロほどの郊外にある、ポートシルカ市の市立学校である。約100人の教職員と1000人を超える生徒が在籍している。大学進学のための準備教育と就職するための準備教育の両方を兼ねているため様々なコースがあることが特徴だ。現在は50人程の生徒が日本語を勉強している。



図1 スピーチの様子

<日本語クラスの見学>

到着してすぐ、日本語を学んでいる生徒の授業の見学と交流を行った。高校2年生のクラスでは到着が遅くなってしまったが、生徒のスウェーデンについての丁寧なプレゼンを聞くことができた。2年生は日本語がとても上手で、スウェーデンの国の概要・行事・文化についてなどを学ぶことができた。

(図1) その後短時間であったがAチームから聖心女子大学の説明や原宿の紹介を行った。

高校1年生のクラスではBチームが用意した発表を行った。たまたま中学生の見学もあったので大人気で楽しい時間となった。日本語はある程度話せる生徒とまだほとんど話すことのできない生徒がいた。私たちは自己紹介をしてから聖心女子大学の紹介と日本の1年間の行事についてのプレゼンをまず行った。その後、豆まきのシーズンであることからお箸を使って豆をとるワークショップを行った。スウェーデンの生徒は寿司を食べるときなどに全員一度はお箸を使ったことがあるようでお箸の使い方がとても上手だった。何分間でいくつの豆が取れるか、1番最初に全ての豆をもう1つのお皿に移せるのはどのチームかなどルールを変えながら何回か対戦をして非常に盛り上がった。



<他クラスの見学>

午前中に見学した美術クラスでは全員がパソコンに向かいながらアニメーション作りを行っていた。アニメーション学科はスウェーデン内に1つだけということで多くの学生がこの美術クラスをめがけて

入学してくるそうだ。日本のアニメはとても有名なのでアニメから日本に興味を持ち、美術クラスの中で日本語を学んでいる人が多い。卒業後は美術分野に進む生徒もいるが、全く違う分野に進む生徒も多く優秀な生徒が多いとおっしゃっていた。

午後に見学した中で特に印象的だったのが経済系のクラスである。このクラスでは在学中に起業化することを目的としている。見学した際にはサステイナブルなストロー作りをしている女の子たちに出会った。木を消毒して沸騰したもので作ったストローをオンラインで販売しているそうだ。作り上げた会社は卒業するとき解体するという。日本では考えられないようなスタイルの学習を実際に見ることができた。

料理系のクラスも驚きであった。週2回一般のお客さんも入る本格的なレストランを運営する。厨房もレストランもかなり本格的な作りとなっていた。(図2)その他にも実際に車の工場のようなブースがあることなど、大きい規模の学校だからこそできる本格的な学びを見学することができ、貴重な経験となった。



図2 厨房の様子

<松井先生のお話、質問に対して>

トゥンバ高校は非常に大きな施設であり、生徒の数も1000人を超える大きな学校だ。学校の敷地内に大きなホールや映画館、体育館、ジム、道場などがあり、他の学校と合同で利用している。日本のように部活動はないがサッカーやアイスホッケーが人気で学校が終わるとそれぞれスポーツに取り組んでいる。学校の校則も日本のようなものは一切ない。文化祭、体育祭のような行事はないがイベントの日はある、盛り上がる時間である。生徒の数が多いため教員の人数も非常に多い。教頭だけで5人もいるとおっしゃっていたのが印象的だった。学校をよりよくするために各クラス1人が集まり代表会議を行うそうだ。

学習スタイルも日本とも異なっていた。日本のようにノートを取りながら授業を受ける機会はとても少ないそうだ。教室は白を基本としており、周りにもものをあまり置かないようにしている。集中できる環境の下で学ぶことができるようにということであった。この高校では母語教育や語学教育もとても大

切にしている。日本語も1990年代はあまり人気がなかったが2000年代になってとてもはやるようになったそうだ。男女間で仲が良いことも特徴であるそうで、グループ活動も男女混ざって協力しながら行っているとのことだった。

<英語の授業、イントロダクションの数学の授業>

英語の授業ではkahootというアプリを用いたクイズをペアで行った。1人1台パソコンを所有しており、クイズの答えを入れるとすぐに電子黒板に結果が出る。正解するとポイントがつくので皆で楽しみながら学習できるととても良いアプリだと感じた。また、スウェーデンの高校生は皆英語がペラペラであった。

イントロダクションとはなんらかの理由で中学の履修単位を取れていない生徒たちのために行われる授業である。この日は5人の生徒が数学で割合の勉強をしていた。筆記用具を持っておらず、その場で話しながら答えさせていた。問題を解かせる時間は電卓を使用していた。思っているよりも発言をしている生徒が多く賑やかだった。

最後に見学した日本語クラスでも私たちのプレゼンをしたり、何人かに分かれていろいろなお話をしたりして、お互いに楽しむことができたと同時に、スウェーデンの生徒の様子や日本の学生にはない部分を沢山学ぶことができ、とても充実した訪問となった。



Day 3 (2月6日)

3-1 公立シェルブリングス学校

日時	2016年2月6日(木)	8:00 ~ 11:00
訪問場所	公立シェルブリングス学校 (Källbrinksskolan)	
訪問先担当者	担当 Elinor Kennero Tonner 校長 Källbrinksvägen 55, Huddinge	
視察目的	障害を持つ子どもなど、特別支援が必要な子どもへの対応を学ぶ。 日本の学校との授業の違いを学ぶ。	
記録者氏名	出口 莉子	

【公立シェルブリングス学校について】

シェルブリングス学校は、約400人の生徒がおり、その内の30%が障害を持っている。主にADHD、自閉症、アスペルガーやうつ病で、それらを重複して疾患している子どもが多く在籍している。スウェーデンにはカリキュラム以外に学校法が制定されており、学校の中で対応しなければならないという義務がある。その中に、対応するための物も含まれる。法律の中で、特に障害がある子どもへの支援が重要視されており、この学校で行われている具体的な対応としては、カウンセラーや心理士を常駐させること、なるべく一般クラス内で対応することなどがある。この学校では、平等な教育を大切にしており、それぞれの子どものニーズに合わせるには全員に同じ教育の仕方はできないと考えられているため、様々な教育の特徴を見ることができた。

【学校の特徴】

シェルブリングス学校が行なっている「4つのプログラム」がある。このプログラムはシェルブリングス学校独自のものであるようだ。

1つ目は、「先生のチームが3つある」ことだ。7、8、9年生のチームに分けられており、それぞれのチームを3人の副校長が指導しており、副校長への指導は校長が行っている。このようにチームを作ったことで、生徒との距離が近づき、教育の質の向上に繋がっていた。

2つ目は、「先生への教育」だ。先にも述べた通り、障害を持つ子どもが多く、中でも見た目で見えないものが多いため、知識がないとただやる気がない子だと思ってしまうこともあるという。そこで、一人一人にうまく対応するために、脳についての勉強を先生たちで行っている。また、チーム内で相談する時間も設けることで、教員の質を上げることに繋がっていた。

3つ目は、「環境設備」だ。教室はグレーと白を基調としており、小さめに作られている。壁に

はポスターなどは貼らずシンプルな見た目にしていた。(図1) また、立って勉強できる場所、座って勉強できる場所の両方を教室に作っている(図2)。このような環境作りが子どもの勉強の質の向上に繋がっていた。



図1：教室の風景



図2：立って勉強できる机

4つ目は、「子どもたちへのアンケート」だ。アンケートは年に2回行っており、どのようにしたら勉強しやすいか、例えば席は前の方が良いなど、を聞き、生徒の情報、需要を理解しているそう。また、スペシャルティーチャーが常駐しており、リソースセンターで勉強に遅れを取った子どもの対応している。

○リソースセンター (図3.4)

シェルブリングス学校にはリソースセンターというものがある。ここでは、勉強で遅れをとった子ども、また、落ち着いた環境での勉強が必要な子どもを、早い段階からフォローしているそう。特に英語、スウェーデン語、算数のフォローをすることが多く、一般の授業を休んで行く。子どもが自ら校長先生などに頼みに行き、自分自身で課題を持って週2～3時間のペースで活用する形となっている。



図3：リソースセンターの内観



図4：リソースセンターの外観

【授業の特徴】

○視察した日の授業の進行

最初に生徒全員のケータイを預かる

↓

授業のタイムスケジュールを書く。何に何分かけるかなど、細かく時間まで書く（図5）

↓

その日のテーマについて先生が説明

↓

2人組みくらいの小さなグループで、担当する内容を調べる

↓

Brainbreak の時間をとる

↓

5~6人のグループで自分が調べた内容を発表、他のグループの内容を持ち帰り発表する



図5：授業のタイムスケジュール

このように、日本の授業とは違う点があった。1番大きな特徴はブレインブレイクの時間が設けられている点であると感じた。子どもの脳が集中できる時間を考慮し、約5分間、脳を休めるためのおもちゃを使って休憩する。プニプニした触り心地の球状のものを触ったり、お手玉のようなもの(図6)を使って脳のトレーニングをしていた。



図6：ブレインブレイク用のおもちゃ

また、子どもが勉強に集中しやすくするために、自分にあった椅子や枕(図7)、重りが入ったベストなどもあった。教科書は全てパソコンに入れられており、1人1つパソコンが支給される。パソコンでゲームをしてしまう子どもたまにいたが、その場で怒ることはせずに、後から先生が違う方法で教えるそうだ。先生と生徒の関係がしっかりしているため、ある程度自由にしても授業は成り立つが、先生の負担は日本よりも重いと感じた。



図7：集中するための枕

成績のつけ方も日本と違う点があった。日本では全員同じ基準のもと、成績をつけるが、この学校では、障害がある子にとってハンデになる分野だと考える場合、その難しいと思われる分野は評価されず、他の部分で成績をつけるそうだ。そのため、全ての生徒が1番良い成績を取ることのできる環境が整えられているそうだ。

【所見】

シェルブリングス学校を視察し、学校の全てが生徒第一で考えられていると感じた。先生が一人一人の生徒の情報、対応の仕方を理解しており、北欧の見捨てない教育を見ることができた。Bromma

3-2 ブロンマ・フォークハイスクール

日時	2016年2月6日(木) 14:00～16:00
訪問場所	ブロンマ・フォークハイスクール(Bromma Folkhögskola) Åkeshovsvägen 29, Bromma
訪問先担当者	Kim Thelander (英語教師)
視察目的	特別な教育プログラムである国民高等プログラムについて学び、内容について理解を深めていく。
記録者氏名	新田 萌々子

【ブロンマ・フォークハイスクール概要】

国民高等学校はスウェーデン最大の特徴ともいえる教育プログラムであり①普通科コース（高校レベルの内容）②特別コース（芸術や職業教育に特化）がある。

国民高等学校のプログラムは”second chance”を与える、再び学ぶことのできる場所であり、普通科コースでは色々な理由で高校を卒業できていない人でも高校の卒業証書をもらうことができる。例えば、就職した後でも自分の人生を見直して専攻の学問を変更する、今ある能力を高めるために学び直すことも選択できる。ブロンマ・フォークハイスクールでは約180名生徒が在籍、コースは8つある。教師20名、生徒41名のための寮があり施設も整っている。移民の方でも国民高等学校を受け仕事に就くことで差をなくすことができ、教育レベルも高くなる。



図1：ブロンマ高校の外観

【ブロンマ高校の学びと歴史】

1800年代のスウェーデンでは教育レベルが低く、多くの国民が高等教育を受けることができなかった。1844年デンマークで初の国民高等学校が作られた。国民全員が平等に教育を受けることができるように、大学に行くお金がない人たちも学べるように国民高等学校を設立した。設立者の考え方は、一般の方も教育を受けレベルを高くすればするほど社会の動きがよくなり、また政治家に意見も言いやすくなると考えた。国民がもっと学びたくなるような大切な機関であり、国民のレベルが高いことは民主主義にとって良いことである。

スウェーデンには156ある国民高等学校は、非営利団体であり学びたい人に場を提供しており営利目的ではない。



図2：食堂

【どのように学んでいるか】

スウェーデン政府は国民高等学校の教育について4つの点が決まっている。

1. 民主主義になっていない国、人権について考える
2. 人が社会に影響、新しい方向にいったほしいならば勉強を行う（社会学プログラムでは政治家にインタビューなども行う）
3. 教育レベルを高めるため（移民の方でも教育を受け仕事に就けるように）
4. 感謝について、ほかの国の文化を学ぶ

授業の特徴↓

- ・少人数グループで学んでいる（3～5人）

- ・50 歳以上のクラスがある
- ・ミーティングポイントも大切にしている
- ・興味があるようなことを学ぶスタイル、授業料は低い

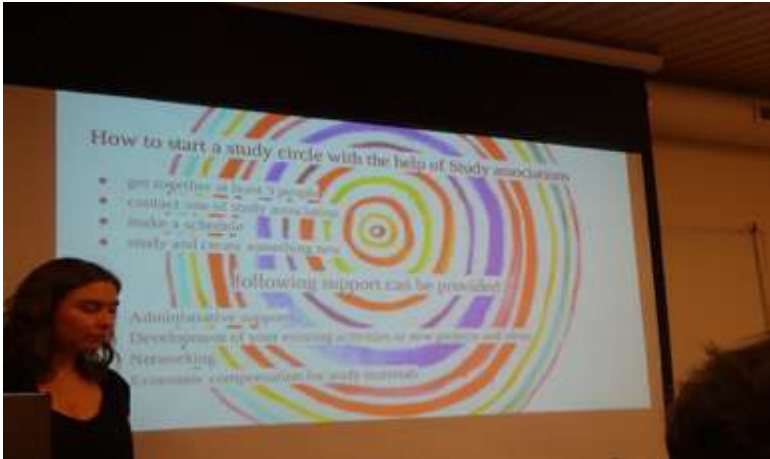


図 3：説明時の様子

・ブロンマ・フォークハイスクールの一般コースには約 40 名。(18 歳以上の方)
 高校を卒業していない人が大学に入るため学んでいる。成績評価は先生が文章で行う。

・特別コース（8 コース）には約 140 名。1～2 年間学ぶ音楽コース、演劇コースなどがある。ブロンマ・フォークハイスクールの学生は音楽を学んでいる人が多くレベルも高い。



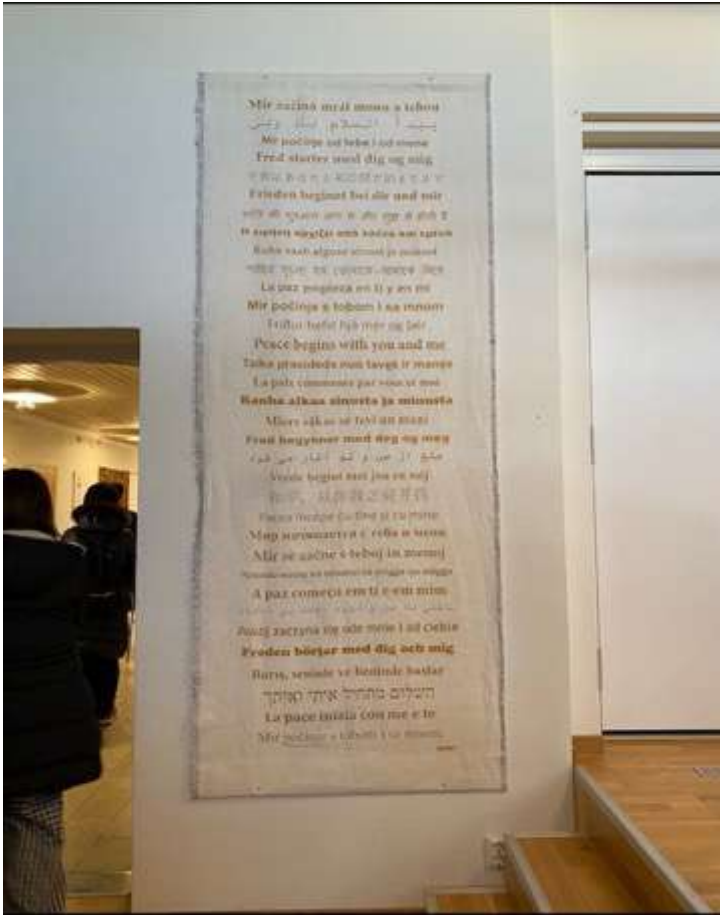


図4：各国語で「平和はあなたと私の間で始まります」

高校1年生でうつ病になり臨床心理士に相談、うつ病が治りブロンマ・フォークハイスクール入学した。

中学3年生で精神的に追い込まれ、高校を中退したが治療で治りブロンマ・フォークハイスクールに入学した。

→様々な事情で入学した生徒や、大学に入学するために勉強をしている生徒などが在籍している。しかし、共通して言えることは皆「勉強したい、学びたい」という気持ちがあるということだ。日本にはない教育制度であり、非常に興味深い内容となった。



中央が英語教師のキム先生（米国出身）

Day 4 (2月7日)

4-1 私立ピスリンゲン・ビョーンゴルデン幼稚園

日時	2016年2月7日(金) 8:30~10:10
訪問場所	私立ピスリンゲン・ビョーンゴルデン幼稚園 (Pysslingen Förskolor Björngården) Ekehelmstorget 10, Stockholm
訪問先担当者	Camilla Doeser 園長
視察目的	就学前教育について理解を深め、どのような工夫をしているのか学び、日本で参考に出来る点を考察する。
記録者氏名	山下友子

《私立ピスリンゲン・ビョーンゴルデン幼稚園について》

- ・スウェーデンで一般的な Pre school である
- ・Pre School で提供することは子供たちへの教育と親が仕事をしている間の学童保育を行う。
- ・各ユニットに1人の先生と2人のアシスタントがいる
- ・学校法によるカリキュラムがある。
- ・7:00~17:00 で子どもを預かっているが、希望者がいる場合には6:30~18:30まで開ける事が出来る。(現在希望者はいない)
- ・子どもは全員で63名、4ユニットに分けている。
 - 1ユニット:1歳~3歳 生徒10名 先生2名
 - 2ユニット:1歳~3歳 生徒15名 先生3名
 - 3ユニット:3歳~6歳 生徒19名 先生3名
 - 4ユニット:3歳~6歳 生徒19名 先生3名
- ・感染症になりにくい、身体的に学べる、地域について学べるなどの理由から1日最低1時間は室外にいるようにする。年齢の高い子どもは森に行き遊ぶ。

《生徒の一日の流れ》

- 7:00~8:00 朝早く仕事に行く両親を持つ子は預かってもらう事が出来る。(学童保育)
朝食を食べる事が出来る。(現在は1名)
預かる子どもが少ない場合、1ユニットにまとめる。
- 9:00~ 先生たちによるアクティビティー開始。
なるべく少人数で活動させる。1ユニットを半分に分けて室内と室外に分けて遊ばせる。
歌を歌ったり本を読んだり算数を絨毯の上に座って行う。
音楽は袋の中からおもちゃを選んでその歌を歌う
- 11:00~ 各ユニットで先生と一緒に食べる

基本は自分で食べるが1歳児は先生に食べさせてもらう。

自分で食べるものを選択できるため、昼食時も自ら選択することが出来る。

好き嫌いなく色々なものを食べてほしいけれど子どもに強制はせず優しくアドバイスする。

- 12:00～13:00 年齢の低い生徒はお昼寝、年齢の大きい生徒は絵本を読んだり、落ち着いた時間を過ごす。
- 13:00～ 落ち着いたアクティビティーを行う。
- 14:00～ おやつを食べる。(パンや牛乳)
午前と同じく室内と室外に分かれてアクティビティーを行う。
- 15:00～ 帰り始める。
- 16:00～ 生徒が帰り生徒数が少なくなるので1ユニットにまとめ室内や室外で遊ばせる。

《工夫》

- ・わざと暗くする
- ・部屋では歌ったり踊ったりする為、あまり家具を置かないで上からの吊るし物を多くする。



図① 暗い部屋に家具は少なく上からの吊るし物がある

- ・マテリアルはすべて子どもが自分でとれる位置に置く。(子どものためのバリアフリー)



図② 子どもの身長に合わせた鏡



図③ 子どものとれる位置家具がある

- ・遊び終わったおもちゃは必ず元に戻させる。
- ・1人1人に個人のファイルがあり、どんな事をしたのか写真で記録されている。この際も子どもたちに写真を撮っていいか確認をとり子どもたちに選択権を与える。インターネット上でもこのファイルを閲覧することが出来る。他人は決して見る事が出来ない。

・プロジェクターの使用

→〇これまで以上に子ども達に本を読んでもらうために本の朗読を聞くだけではなく、アクティブに本読みを体験するプロジェクト

例1：プロジェクターを使用してほんと部屋をつなげてリアルに本を朗読する。「knock on the door」

例2：バスのお話をバス停にラジオを持って行ってそこで読み聞かせる。



図④ 本が多く置かれている小部屋

《多様性について》

スウェーデンでは①性②歳③障がい④GenderIdentity⑤性的思考⑥宗教⑦民族の7つの差別をなくしていくように示されているがこの学校では特に子どもたちを平等に扱うように努力している。

この私立ピスリンゲン・ビョーンゴルデン幼稚園はLGBTの認定を受けている。この認定を受けるために8か月の間に1回4時間の男女平等に関する指導を5回受ける必要がある。

(工夫例)

- ・アンケートの家族欄に“父、母”のように記載しない
- ・子どもを呼ぶときに“女の子、男の子”と呼ぶのではなく“お友達”と呼ぶ。
- ・すべての子どもが男女関係なく好きなようにさせ、尊重する。
- ・人形などは女の子や男の子や肌の色など様々なものを用意している。



図⑤ 多様性を感じるポスター

- ・他人と違っていてもおかしいものではないと教育する。
- ・昔の男女の区別がついている本を捨てるのではなく残したまま新しい本を買い足す。
- ・転んだ時などのように咄嗟に出してしまう自然的な男女での扱いの差をなくすように努力をしている

4-2 子どもの権利擁護団体(BRIS)

日時	2020年 2月 7日 (金) 11:00 ~ 12:30
訪問場所	子どもの権利擁護団体(BRIS, Barnens rätt i samhället) Arenavägen 61, Johanneshov
訪問先担当者	Mikael Dackner 国際コーディネーター Malin Berggren Griffiths カウンセラー
視察目的	<ul style="list-style-type: none"> ・BRIS の活動の実態 (歴史、組織、業務内容など) ・BRIS の存在意義 (子どもの権利はどのようにして守られているのか) ・BRIS の活動は、新しい国内の法律¹にどのくらい影響を受けているか
記録者氏名	長嶺瑞歩

▷BRIS とは？

BRIS とは、子どもの権利を守るために①1971年に設立されたNGO団体のことです。BRISは、CHI (Child Helpline International)²のメンバーシップから成る、スウェーデンだけの組織なのです。BRISの中央事務所はストックホルムにありますが、その他国内に5つの地域事務所があります。BRISは、②全国の子どもや若者、大人までもが無料かつ匿名で利用できるヘルプラインや、チャット、メール等のサービスを提供しています。③BRISのヘルプラインの番号は、「116 111」です。これは、ヨーロッパ中の④助けが必要な子ども達が利用できる番号になっています。

①BRIS 誕生秘話とこれまでの歩み

BRIS が 1971 年設立された背景には、あるセンセーショナルな事件がありました。それは、スウェーデン国内に住むある母親が、わずか 3 歳の愛娘を虐待したという事件です。これをきっかけに、「親が子どもを叩いてはいけないという法律をつくろう！」と一部の人々が立ち上がりました。そう、これが BRIS の始まりです。この法律が実際にできる (1979 年) までは多くの母親達が反対したそうですが、法律ができて 2 年後、反対派はわずか 2 割にまで減っていたのです。世の中の法と人々の考え方を変えた。これぞまさに、団体における最初にして最大の功績と言えるでしょう。また、翌 72 年には、子どもと市町村の担当窓口をつなぐコールセンターが設立されました。続く 80 年には、子どものみ対象としたコールラインが開かれました。2001 年からは、E メールサービス、2007 年からはチャットサービスを始めると、社会の変化に応じて活動の幅を徐々に広げているのです。

¹ スウェーデンでは、2020 年 1 月から「子どもの権利条約」が国内の法律として運用されている。

² 145 カ国の子ども達のための約 190 にもわたる国際的なヘルプラインネットワークのこと。

②どんな人達がどのくらい BRIS を利用するのか

メール・電話・チャット相談は、年中無休の p.m2:00～p.m9:00 の時間帯で利用できるのはもちろん、後から発生する電話の請求書にも履歴（子どもが BRIS に電話したという事実）が残らないようになっています。2018 年度は、なんと 2 万 6 千件もの子どもの相談に応じたそうです。BRIS を利用する多くは（性的アイデンティティが）女性で、13～18 歳のいわゆる思春期の子ども達からの相談が最も多いようです。もちろん、子どものためだけでなく、大人のためのヘルプラインも存在します。こちらは平日の 3 時間限定で利用でき、子どもに関する疑問や問題の話をしながら、「子どものために一体何ができるのか」を相談者とカウンセラーが共に考えていくことが目的とされています。

③その他 BRIS が提供する主なサービス

- ・子どもヘルプライン/・BRIS メール/・BRIS チャット/・大人のヘルプライン
(PTSD、難民、里親、自殺した家族がいる家庭の相談プログラムもあります。)
- ・Barnperspektivet.se：子どもに自らの権利を自覚させるとともに、大人に自身が担う義務について認識させることを目的とするウェブサイト。
- ・BRIS ACADEMY：子どもとかかわる機会が多い仕事をする大人のための教育プログラムの提供や、ワークショップの実施を行う場。

④具体的に寄せられる相談内容

相談はどんな内容でも大丈夫だそうです。友達と喧嘩した話も、かわいがっていた愛犬が亡くなった話も、全てカウンセラーの方が優しく聞いてくれます。特に多い相談内容は、「精神的な課題」や「家族間の問題」、「虐待」についての相談だそうです。また、毎日送られてくるメールの内容には、「自分に自信がない」や「自殺したい」などといった文面のほかに、「私のうさぎが亡くなった」というような内容も含まれているそうです。

【+α BRIS 流！子ども達の悩みにどう向き合う？】

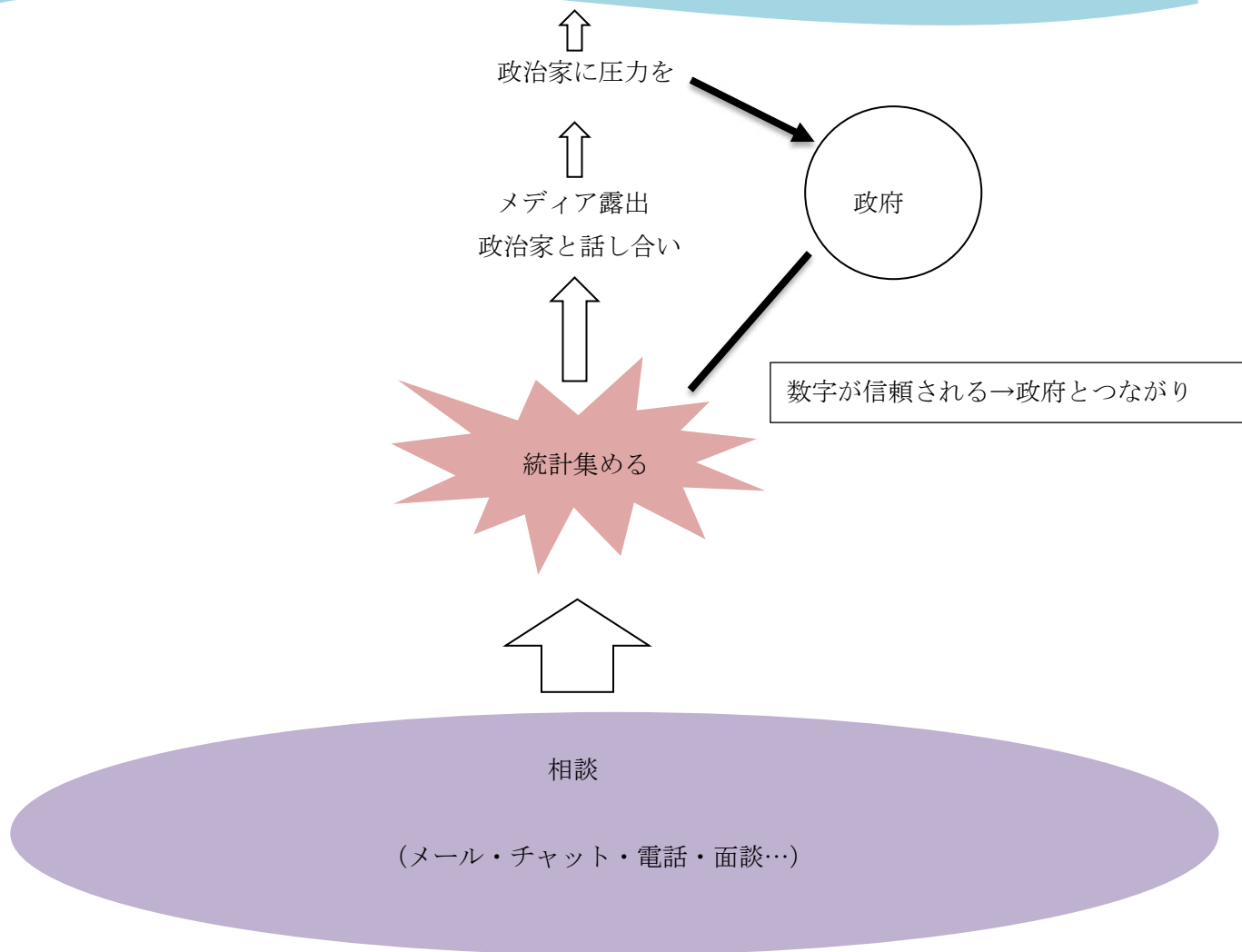
カウンセラーさんのお話

BRIS では、相談者の悲しみが長く続くようであれば、他の機関とも連携を図ります。当事者にとって辛いことを他人に話すのは容易なことではありませんが、大変な経験を人に話すことによって、本人がそのことを理解できるようにさせるのが私達の仕事です。これは、アルトノスキーの「心の中の悲しみは出さなければならない」という言葉にも表れています。私達は相談者に「①何が起きたか②気持ちはどうか③これからどうすればよいか」を順番に尋ねていき、じっくり時間をかけながら一緒に向き合っています。

▷BRIS の存在意義とこれからの課題

BRIS の戦略

子どもにとって良い社会へ



BRIS で対応するカウンセラーは、単にボランティアではなく**プロ集団**です。今回お話を聞いた方によると、今はまだ表面化していないが、これからカウンセラーの人手不足が心配されるかもしれないとおっしゃっていました。また、「子どもの権利条約」が国内の法律として定められたことについて意見を求めると、法律を守るだけでなく、本当の法律となるようにフォローアップしていくことが BRIS の役割だとおっしゃっていました。

▷参考資料

BRIS HP <<https://www.bris.se/>> (参照日 2 月 13 日アクセス)

4-3 公立グリムスタ基礎学校

日時	2020年2月7日(金)
訪問場所	公立グリムスタ基礎学校(Grimstaskolan)と学童保育施設 Kanngjutargränd 12, Vällingby
訪問先担当者	Marita Svahn 校長, 副校長
訪問目的	移民の多い学校での対応や取り組み、教育的課題を知る。
記録者氏名	四宮菜々

<見学の流れ>

- ・校長先生、副校長先生からのお話
- ・準備クラスの先生のお話
- ・学校案内
- ・FIKA(9年生と交流)



<Grimstaskolan について>

学年：0-9年生(6~15歳)

※2019年より0年生も義務教育化

生徒数：約620人

教師数：約135人(各職員も含む)

1956年に創立され、校舎は6-9歳と10-15歳でわかれており食堂と体育館は共同で使用している。重度の自閉症・ADHDの生徒のための建物も設けられているが、軽度の生徒は共に学んでいる。主に学校の近くに住む生徒が通っており、多くが外国に背景をもつ子どもたちである。スウェーデン語以外の43か国もの母国語を話す子どもたちが在籍している。

<学童保育>

学校の後に希望者が通うことができ、学童保育は有料である。しかし親の収入によって自己負担料が変わる。2016年からは学童保育も学ぶべき内容がカリキュラム化されている。

<外国にルーツをもつ子どもたち>

移民が多いため特別クラスが用意されている。特別クラスの担当教員がいる。生徒は初めに家族と通訳の人とともに訪れ、彼らのバックグラウンドを知るためにアンケートを行う。アンケート内容としては誰と暮らしているのか(家族、1人)、どこまで学んでいるのか等。学習が進んでいる生徒もいれば、戦争など諸事情により学校に通えていない生徒もいる。

【準備グループ】（現在：18名。2015年：39名←過去最大）

- ・7-16歳の子どもが年齢関係なくミックスされている。
- ・様々な国の子どもたち。学習レベルも様々である。
- ・教師は日常言語と学習言語を混ぜて話す。

・1ヶ月間、挨拶や基本単語を学ぶ。

→1ヶ月後、技能の授業（5教科以外）から自分の学年のクラスに入る。

→環境や言葉に慣れ、徐々に参加する授業の種類を増やしていく。

（安心のためはじめは、準備グループの教員が同伴する。）

・1ヶ月経過後、親と面談を行う。（友達はできたか、安心して通えているか、今後の学習科目はどうするか）。保護者とのコミュニケーションを大切にし、保護者に明確に情報を伝える。子どもだけがスウェーデンの教育システムや現状を理解し親が理解できていないと、子ども自身がコントロールしてしまう心配があるから。

・子どもたちは長くて2年間、少なくとも6ヵ月間このクラスに通う。

○授業内容

- ・スウェーデン語を学ぶ。
- ・スウェーデンの地理、動物、民主主義のプロセス。（＝社会科学）、算数 等。
- ・写真や絵を用いた学習、プラスチックの果物（レプリカ）を用いて理解する。視覚的。

○ヘルスケア

- ・看護師：ワクチン接種の有無、病気の診断、カルテを作成。
- ・カウンセラー：教育相談、進路相談。
- ・臨床心理士：担当教員は3週間に1度指導を受ける。

○クラス内の課題

- ・戦争している国同士の生徒の衝突。
- ・宗教的問題。（学校で起きた問題に対して、国の宗教の相違を原因にしてしまう。）
- ・言語不足による暴力の問題。
- ・スウェーデンに移住するまでに起きた事件のトラウマをもつ子どものケア。

○学校の利点

- ・一般の学校に比べて、生徒は多様性を理解しオープンである。
- ・友達同士で家庭の事情をよく理解できる。
- ・他人のことをよく考え、誰かの忘れ物も盗まず事務室まで持ってきてくれる。

○その他

- ・アイススケートやスイミングは、スウェーデンでは一般的に親が教えるためこの学校が手厚く指導している。
- ・中学生は必要があれば学校で朝食・昼食を出す。

<学校見学>

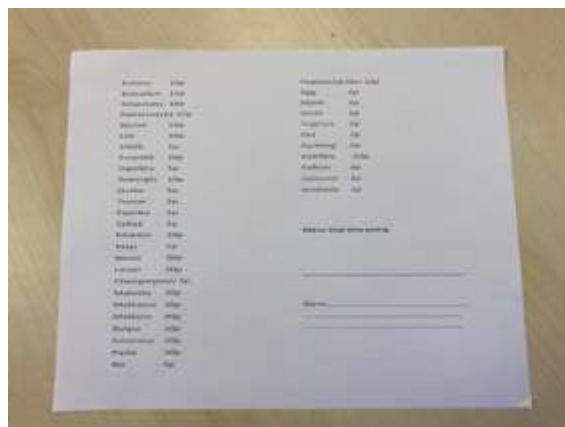
○8年生の理科の授業

- ・ノート教科書は使用しない。
- ・5ヵ国語を話す生徒もいる。
- ・学習言語の習得には混乱もあるが、元々母語では学んでいない単語のため学びやすい。
- ・先生曰く、2つの言語を並行して学ぶことでより言語習得が促進される。



○家庭科の授業

- ・健康面、環境面、経済面に配慮した食事を自分で献立を考え、調理する。
- ・先生の作成した表を基にポイントが加算減算される (○○ - 10 / ○○ +5)
- ・音楽を流して環境づくりがされていた。



○2年生

- ・低学年は、基本的に教室移動はなく同じ部屋で行う。
- ・算数はシンガポールの授業を参考に、ディスカッションの後アイデアを出す。クラスで4つ出たら先

生から旗がもらえる。

- ・良いこと悪いことを子どもたちが考え、良いものを増やしていく取り組み。
- ・教師は騒がしくなったとき叫ぶのではなく、笛のような小さなハーモニカを鳴らす。



○学童保育

- ・活動内容は生徒と先生で決める。
- ・期限を設け、意見箱に自分の意見を書いた紙を入れて投票する⇒民主主義のプロセス。
- ・年上の学年が0年生の面倒を見る活動もある。

○母語保持教育

- ・週に一度、母語を学ぶ時間が設けられている。
- ・74ヵ国ものグループがある。

<安心した学校生活を送るために>

- ・安心して学校に通えるように兄弟・友達と登校する子どもが多い。（戦争のために学校に通えなかった子どもたちにとっては通いやすい環境である）
- ・9割が歩いて10 - 15分以内の場所に住んでいる。
- ・周りに住むすべての子どもたちが学校に通うよう責任をもって活動している。
- ・他国から移住してきた親に対しても翻訳されたパンフレット等で提供、対応している。
- ・親の責任は子どもが学校まで来ること、学校に来たら学校の責任だと考えている。

○学校に来ない場合

- ① 市町村のソーシャルサービスに相談
- ② ソーシャルサービスのセンターと連携（予防のため）
- ③ 保護者へのABC教育（12歳までの子どもの育て方の基礎教育）
 - ・たたかない教育
 - ・教師とセンターのプロが親に教える。
- ④ ティーンエイジャーの反抗期の子どもへの教育（13 - 16歳）
 - ・どう考えれば暴力的な反抗をしないで済むかの指導

○なぜこの学校を選んだのか（教師への質問）

- ・達成しなければいけないものがたくさんあるから。
- ・教師の責任が大きいから。（教科だけではなく、スウェーデンのシステムや生活をサポートする）
- ・不良だから学校をやめさせられるのではなく、それでも支援をし続けてくれる。（卒業生より）

○教師としての考え方、何を大切にしているか。

- ・支援があればどんな生徒でも成功できるという考え。
- ・就労相談など、親にできない（親が失業している場合もある）相談を手厚く対応することが必要。
- ・生徒にとって先生という存在は「大事な人」である。
- ・生徒と先生の関係が非常に大切。
- ・人間性を育て、子どもたちが成功する責任をもっている。
- ・難民だからかわいそうだ、とは思っていない。
- ・言語に関しても、簡単な言葉ばかり使うのではなく、子どもたちの未来を考えてスウェーデンの子どもたちと同じように難しい言葉も使う。

<9年生との交流 FIKA>

- ・週2回サポートの人と先生が宿題を手伝ってくれる。放課後15～16時。
 - ・部活動はないが、放課後運動をするときもある。
 - ・金曜日は早く帰宅する。
 - ・絵を描く、英語、数学、体育、家庭科（cooking）等好きなものは様々。
- 自分の好きなことを理解している。
- ・自分で高校の視察をする。高校は自分の興味のある分野を選択する。
 - ・8年生で2週間職場体験に行く。その際にも先生と面談し、何をしたいか何が好きかじっくり話す。
- 基本的には体験先は自分で探す。
- ・進路相談が週1回設けられている。
 - ・日本の就活もなければ、スウェーデンには新入社員制度はない。
 - ・この学校に通ってよかったことは、先生が優しいことと給食がおいしいこと。
 - ・勉強だけでなく、教師が自分たちを助けようとしてくれていると感じる。
 - ・良い友達もいれば悪い友達もいるが、いじめはほとんどない。あってもすぐ大人が対応してくれる。
 - ・大変なことは、宿題とテスト。また時間割がよくない年もあり、授業間の5分休憩がない時もある。
- 2時間授業は長い。
- ・中には叫んだりするうるさい生徒もいる。
 - ・放課後はジム、ネットフリックス、勉強 等。
 - ・将来は、人を助けられる人、人に優しくできる人、アメリカや色んなところに住みたい。



調理実習室にて



職員室で外国に背景のある生徒たちと FIKA（茶話会）

Day 5 (2月8日)

5-1 スカンセン

日時	2020年2月8日(土)
訪問場所	野外博物館 SKANSEN
視察目的	スカンセンは世界で最も歴史のある野外博物館です。古い民家や農園が移築・復元されており、自然と共に生きてきた昔の人々の暮らしぶりが再現されています。それぞれの時代の生活、文化、仕事、伝統行事を通じ、スウェーデンの歴史を追体験を目的として訪問しました。
記録者氏名	矢野汐里

2月8日、ホテルで朝食を食べた後、ストックホルム・オーデンプラン駅からバスに乗ってストックホルムのユールゴールデンにあるスカンセン野外博物館へ向かいました。スカンセン野外博物館はスウェーデンで初めての動物園および野外博物館で、世界で最も歴史のある野外博物館です。

19世紀の平均的な街全体のレプリカなどを見ることができました。施設の中には伝統的な衣装を着たさまざまな職人がその時代の技術を披露していました。また、野外の動物園もあり、ヨーロッパバイソン、ヒグマ、ヘラジカ、ハイイロアザラシ、オオヤマネコ、カワウソ、アカギツネ、トナカイ、オオカミ、クズリなどの動物が飼育されていました。また農場もあり、まれな品種の家畜が見られることもあるそうです。



図1 ヴァラスクール



図2 20世紀初頭の学校の先生の衣装をつけた博物館員が当時の学校の教具や教員の生活について英語で説明



図3 動物園エリアのトナカイ



Day 6 (2月9日)

6-1 スウェーデンからフィンランドへ

この日はお昼過ぎにストックホルムから飛行機に乗り、夕方にヘルシンキに到着するスウェーデンからフィンランドへの移動日であり、スウェーデンで過ごす最後の日でもありました。ホテルのチェックアウトまでは時間があり、各自自由時間を楽しみました。ストックホルムからヘルシンキへの飛行時間は非常に短く、離陸して間もなくしてシートベルト着用サインが点灯するような感覚でした。

ヘルシンキへ到着し、ホテルのチェックインを済ませ、ホテルのすぐ裏にあるショッピングセンターへ向かいました。こちらのショッピングセンターには地下に地下鉄の駅も併設されており、非常に便利でした。翌日向かう学校への駅の行き方や、切符の買い方などを確認し、夕食は各自で食べるという形でフィンランド初日は終了しました。(齊藤萌奈)

ストックホルムのホテルの部屋から見えた朝日



ヘルシンキへ向かう際の飛行機



Day 7 (2月10日)

7-1 エスポー市立リヴスニエミ学校・プリスクール

日時	2020年2月10日(月) 9:00 ~ 12:30
訪問場所	エスポー市立リヴスニエミ学校 (Livisniemen koulu) Arttelikuja 4, 02260 Espoo
訪問先担当者	Ms. Leila Tuominen, Principal Ms Astrid Kauber エスポー市教育部多文化・言語事業課長
視察目的	<ul style="list-style-type: none"> ・エスポー市で行われている多文化教育について学ぶ ・校長先生からのお話や、在學生(小学校6年生)の子どもたちに学校案内をしてもらい、リヴスニエミ学校で行われている学びについて知る
記録者氏名	渡辺彩花

☆学校概要と学校見学の記録

エスポー市立リヴィスニエミ学校(図1)は1995年に設立され、2005年に増設された3学期制の小学校で6歳児が通うプリスクールが併設された学校である。現在、0~6年生の児童370名が通っており50名がフィンランド語以外の、27名(特別支援教員は3名)の教員が在籍している。プリスクールではインクルーシブ教育の準備教育なども行っている。学校案内は3チームに分かれて、それぞれに小学校6年生が2名ついて案内してくれました。

図1: リヴィスニエミ学校の外観



プリスクール: 6歳クラスの子どもたちはカードを使ったアクティビティーをしていました。



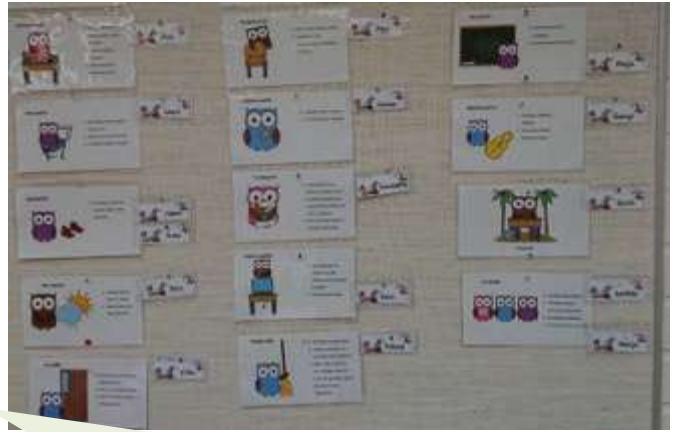
音楽室：日本と違って、机はありませんでした。私たちにリコーダーの演奏を披露してくれました♪



教室風景：五角形の机が印象的でした。詳しい理由は分かりませんが、グループワークがやりやすいと、私のガイドをしてくれた Laura ちゃん、Ronja ちゃんが教えてくれました。



カフェテリア：お昼ごはんをグループごとにいただきました。自分が食べられる量を取ることができます。



児童たちの作品：スウェーデンと違って、フィンランドでは日本のように生徒の作品などが壁に飾られていました。

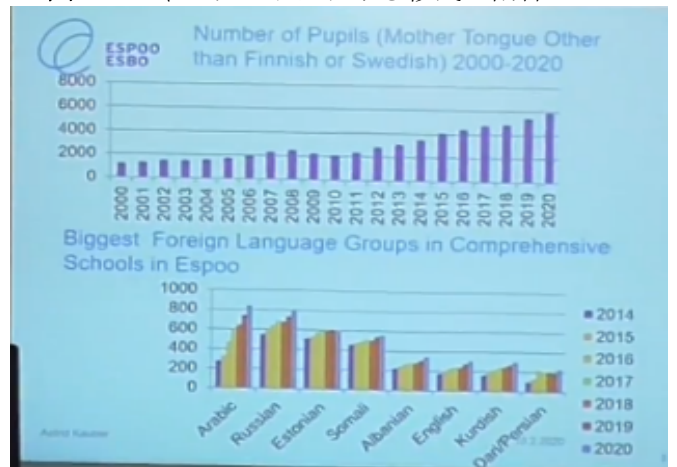
☆エスポー市の多文化教育について

教育委員会の職員で多文化教師をしているコルベン先生からエスポー市で行われている多文化教育について説明していただきました。フィンランドのエスポー市はヘルシンキに次ぐ第二の都市で人口は約30万人、年々増加傾向にある。そのうち16%が外国に背景を持つ移民の人たちである。義務教育段階で言えば20%が移民の子どもたちで、過去10年で劇的に増えている。ロシアやエストニアから出稼ぎに来る家族が多いが、現在一番多いのはアラビア系の話者である。（図2）

フィンランドの義務教育はスウェーデン同様、6歳（0年生）でプリスクールに入り、小学校6年、中学校3年の10年間で構成されている。

移民・難民の子どもたちもそれぞれの年齢に応じた全ての教育制度を受ける権利を持っていて、必要に応じて補助的な支援も行われる。9年間の基礎教育段階では、準備教育期間終了後に集中的な特別支援があり、第二言語としてのフィンランド語のサポートが行われるのはもちろんだが、他のヨーロッパ圏の国とは違い、フィンランドでは放課後、母語教育も週一回、2時間受けることができる。プリスクールではインクルーシブ教育が行わ

図2：フィンランドにおける移民の割合



れているので、通常学級に入り、担任と言語サポートをする特別支援の先生がサポートを行うが、この特別支援の先生は常にいるわけではない。エスポー市では基礎教育段階で1,2年生、3~6年生、それ以上と年齢を分けて、10~12人程で構成されている準備学級が28カ所で設けられ、担任とアシスタントの先生によるチームティーチングで第二言語としてのフィンランド語を中心に、他の科目も勉強をし、それまでの知識量を確認しながら各個人の教育計画を立ててサポートしていく。この準備学級1年かけて行い、その後、通常学級に入る。通常学級に入った後も、必要に応じて特別支援や科目別サポート等

を行う。最近では、担任の先生や教科の先生（フィンランド語を話す教員）と母語教員が授業計画から一緒に行動するという二言語でのチームティーチング（**Co-teaching**）が進んでおり、現在は 16 言語で **Co-teaching** が行われている。また、16 歳以上でフィンランドエスポー市に難民として入国してきて、義務教育段階の教育を受けていなかったり、フィンランド語が全く話せない人は成人教育機関やプレパラと呼ばれるところで準備教育を受けることとなる。

フィンランドでは言語を教えるとき、文化的な多様性を配慮しており、カリキュラムでは**言語学習の質を平等化**というように質の保障がされている。言語に関して言えば、どの教科を教えるにしても言語は基本となるため、**すべての先生が言語の先生**と考えられている。児童福祉については、移民の子どもたちに対しても授業量は全て無料であり、学校内で地域の福祉士が介入し、学校と連携しながら個々の福祉の対応に当たっている。

フィンランドに移民としてきた子どもたちへの支援はもちろんだが、家族に対するサポートも必要となってくる。子どもの両親がどちらもフィンランド語を話すことができない親や、全く学校へ行ったことがない親もいる。そのためフィンランドの学校には、移民の子どもと同じ母語を話すチューターがいて、子どもだけでなく、家族にもなるべく早くフィンランド社会に馴染んでもらうために様々な活動に参加してもらったり、文化ワークショップという移民・難民の人たちが自分たちの文化を紹介するという行事、親たち（移民の親、そうでない親どちらも）が料理をつつにしながら、お互いを知るといったことも行われている。

多文化教育を行うとき一番重要となってくることは、『**すべての言語が大事である**』ということ子どもたちに教えることであると、コルベン先生はおっしゃっていました。そして、それに関する子どもたちの実践例も紹介してくれた。（**図 3, 図 4**）

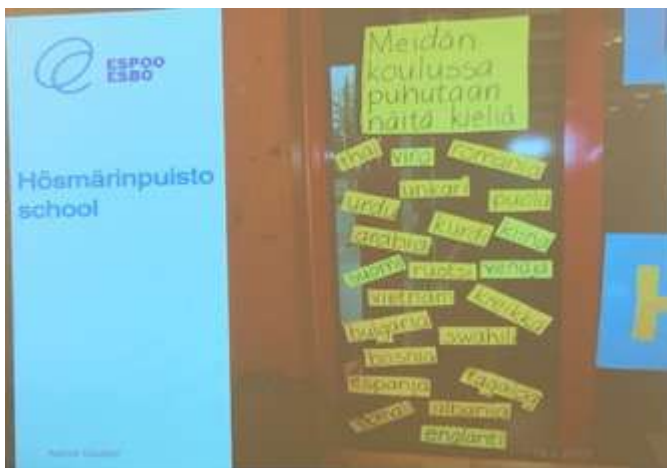


図 3 : 学校内でどんな言語が話されているか、書かれている

図 4 : いろいろな言語で食べ物を表す

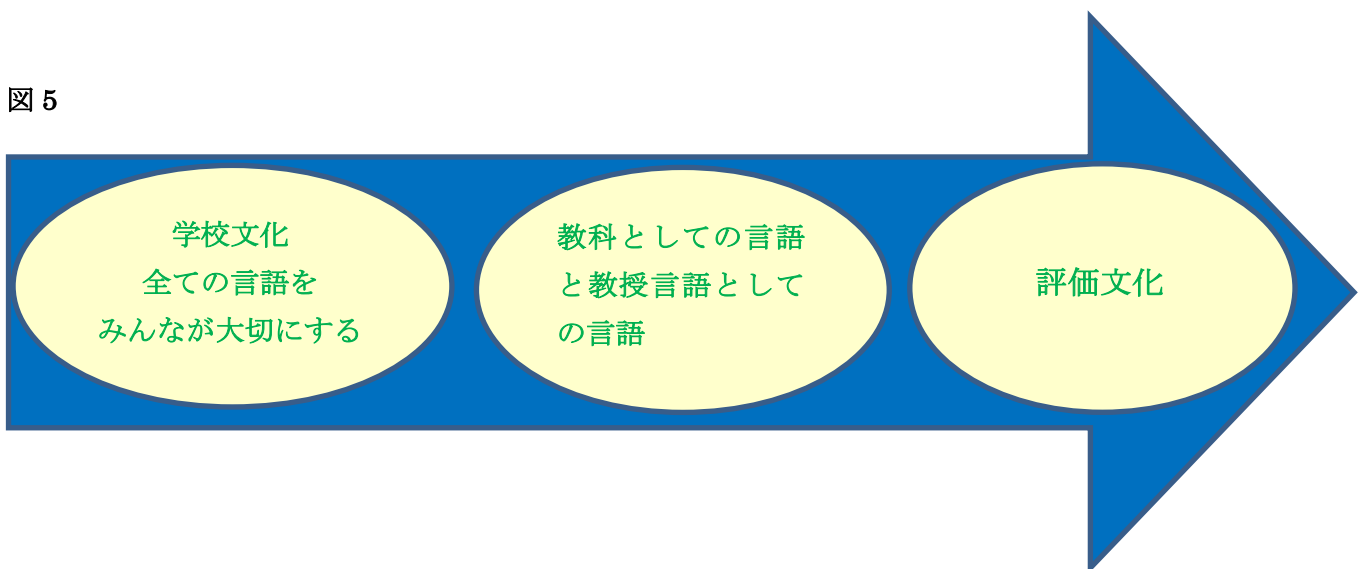


現在、一番の課題は移民・難民の人たちをどのように学校に関わってもらえるようにするかということである。定期的な父母会に通訳がいたとしても移民・難民の親は来てくれないため、文化カウンセラーを配置して、文化的な多様性の理解と精神的な面からもサポートを行っている。また、同じ出身に親同士によるサポートもあり、フィンランドの学校でどのようなサービスが受けられるのか、福祉に関する事など情報交換を行っている。他にも、**宿題クラブ**というものがあり、子どもだけでなく、その親たちも呼び、親と子どもがそこで一緒に宿題をすることで、子どもにどう指導するかということを学ぶといったことも行っている。

☆言語への気づき

多様な言語を教えたり、学んだりすることに関して大切にされている考え方で図に示して表すと以下のようなになる。(図 5) この 3 つの領域全てにおいて言語を大切にするという**言語の気づきプログラム**が行われている。この 3 つの領域の中で一番難しい領域は評価である。評価の先生は評価の知識はたくさん持ち合わせているが、フィンランド語をどのように評価するかについては身につけていないため現状では課題と言える。

図 5



教科教育において先生たちがどのように言語の気づきについて指導していくかということに関して、以下のようにまとめられていた。

- 1,生徒たちの言語的背景や、これまでどのような教育を受けてきたのかを知ること
- 2,第二言語を教える原理や原則をきちんと理解して、自分の授業に取り入れる
- 3,学校のクラス内での様々な活動にどんな言語が必要か見出す
- 4,子どもたちが分かりやすいように教える
- 5,多文化・多言語ということを重視し、他の言語も使用しながら教えていく

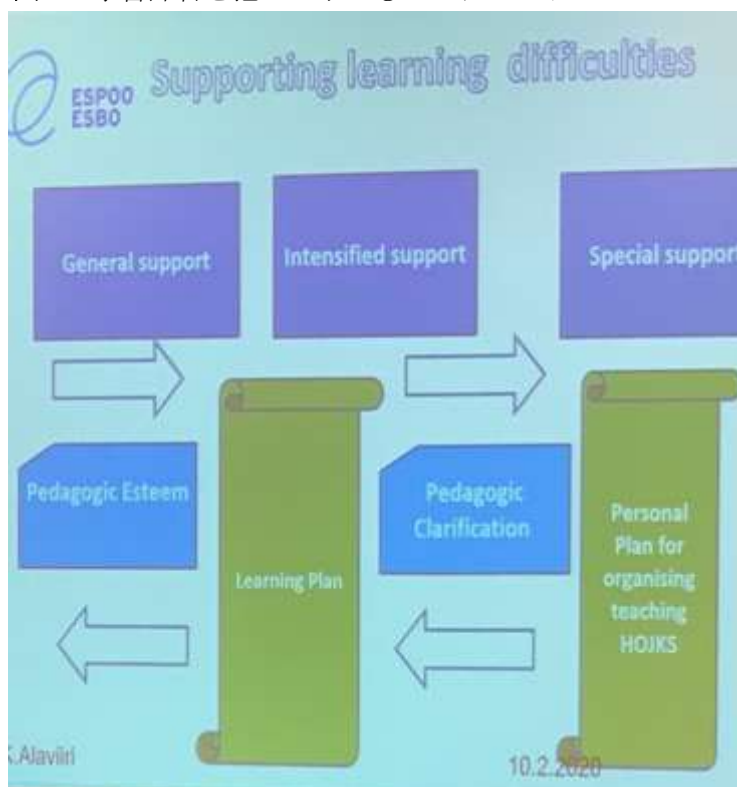
しかし、先生たちはこのようなことを教員養成段階では教わってきてはいないため、現在たくさんの研修が全ての教職員に行われていたり、教員養成センターや学校内で教育カフェと呼ばれる、先生たち同士で情報交換を行う時間（ミーティング）が設けられたりしている。

☆リヴィスニエミ学校について

校長先生のお話によるとリヴィスニエミ学校は『**良いマナー、道徳、社会性**』に力を入れている学校で、階段など所々に前の校長先生が残した、みんなが守るべき大事な価値観が書かれ、そこを通るたびに思い出せるようにしたり、各学期で1～3個の重点を置く価値観を決めるなどして道徳観を養っている。（このときのテーマは「責任ある消費者」ということで、「責任感」や「勇気」のような言葉が挙げられていた）また、**みんなで話し合うこと**を重要視しており、そこから社会性も育てている。2016年のカリキュラムより**アクティブラーナーを育てる**ということが目標とされ、まだ実現できていない面もあるが、生徒自身が計画を立て、学ぶ方法や評価方法が選ぶことができるようにして、児童の話によるとフィンランド語であれば、ノート（紙と鉛筆）を使用するか、パソコンで学ぶかを選ぶことができたり、評価は作文かテストを選んだり、グループテストが行われていたり、自分たちで問題を作成して、みんなで答えるというのを評価に変えるなど様々な評価方法があった。この理由として、フィンランドではナショナルカリキュラムがあって、それが達成されているかに関しては教員が見るが日本にある全国学力テストのようなものは高校卒業まで一切無いため評価方法を選ぶことができるからである。

今までは生徒一人ひとりを見てきたが、今は学校全体が『**学習共同体**』をコンセプトとしながら動いていて、**全体でどうなっているのかを考えている**とおっしゃっていました。このように考えるようになったことで、“いじめ問題等を当事者たちだけでなく、**全員で解決できるようになった**ので、とても重要なことだと思う”と児童の一人が話してくれた。また、学習障害を持つ子どもや、支援が必要な子に対して特別支援教員が週1～2回会って、対策を講じている。右の写真は学習障害を抱えた子どもへのサポートを示したものである。（図6）

図6：学習障害を抱えた子どもへのサポート



学習段階を 3 つに分け、少しの問題であれば、その子に関する書類を書いて**一般的支援 (General Support)** に送る。ここでは少人数グループでの対応を行い、そこで足りなければ、**より深い支援 (Intensified Support)** で個々の学習計画を立てながら、個別もしくは特別支援教員がいるクラスで対応し、そこでも不十分であれば**特別支援 (Special Support)** で個別対応もしくは小グループ対応 (10 人以下) へと移行していく。リヴィスニエミ学校には特別支援クラスが 4 クラスあり、このクラスに送るときは、かなり教育学的な観点からの理由付けがされた書類と市の教育委員会の認可が必要で、その書類に基づいて個々の個別計画を立てなければならない。もし、学習の障害が良くなったときなどは、それに応じて教育学的理由付けがされた書類をつけて段階を移動させることも可能である。(Special Support⇒Intensified Support など)

リヴィスニエミ学校のようにプリスクールと小学校が併設されているのは珍しいため、ここではそれを活かした学び、例えば 0 年生と 1 年生で合同の遠足を行って、0 年生に小学校の雰囲気や学んでもらっている。0 年生から先生方は子どもたちを見ているため、1 年生へのクラス分けをするとき男女比はもちろん、学力の差も見ながらクラス分けを行っていて、そのとき心理士や福祉担当の先生と相談しながら小学校で特別支援が必要かどうかなども早いうちから見ている。校長先生はプリスクールと小学校の連携の一つとして、読み方と算数に関しては日本のように**全学年で習熟度別**に分け、習得が早い子どもには 1 年生の内容をプリスクールの段階で学ばせたり、逆に学校嫌いにさせないためプリスクールに少し長めに滞在させるといった**差をつけること**も今後は考えているとおっしゃっていて、これは今までのフィンランドの教育では競争させないことを重視していたということを見ると、とても興味深いお話でした。

〈参考文献〉

リヴィスニエミ学校ホームページ

https://www.espoo.fi/en-US/Childcare_and_education/Comprehensive_education/Comprehensive_schools/Primary_schools/livisniemen_koulu (2 月 24 日参照)



英語で学校案内をしてくれた6年生の児童と

7-2 イソ・オメナ・ネウボラ

日時	2020年2月10日(月)	13:00~14:00
訪問場所	イソ・オメナネウボラ(Iso Omena Maternity and Child Health Clinic) Piispansilta 11, 02230 Espoo	
訪問先担当者	Minna Eväsoja	
視察目的	フィンランドの育児支援サービスである「ネウボラ」の概要を知ること、フィンランドにおける子育ての価値観を学ぶ。また、日本が参考にできる点について考察する。	
記録者氏名	佐藤 真実	

フィンランドでは、妊娠から就学時までの子育てを支援するサービスを行う施設である「ネウボラ」が国内各地に点在している。今回視察した Iso Omena Service Centre は、ショッピングセンターの1フロアが保健、教育、医療、社会福祉などに関する様々なサービスを受けることができる空間として構成されている複合商業施設であり、その中にネウボラがある。

フィンランドにあるネウボラの中でも、Iso Omena Service Centre にあるネウボラほどに利便性の高い施設は他になく、日本や中国、韓国などの海外からの視察だけでなく、フィンランド国内からの見学もあるという。



図1. Iso Omena Maternity and Child Health Clinic 入口

○ネウボラの歴史

フィンランドでは、1890年頃、感染症や下痢による乳幼児死亡率がとても高かったという。そこで、フィンランド人の小児科医である Arvo Ylppö がドイツで学び、そこで知ったフランスのモデルを取り入れ、1904年に、Maitopisara と呼ばれる、ネウボラの原形となる施設を作った。Maitopisara は特に、母乳が出なくなってしまった母親のために、子どもの栄養について両親に助言するのと同時に、新生児に適した人工ミルクを配るなど、ボランティアで貧しい家庭の子育て支援をした。

その後、Ylppö 医師は、1922年に、1歳から6歳を対象として「ネウボラ」の事業を始め、4年後の

1926年には妊婦と乳児のネウボラを作ったという。ネウボラでは、医師と保健師が、子どもの健康状態を確認するとともに、子どもの家族に対しても、子どもの病気や栄養、子育て、感染症などについて、無料で指導していた。そして、ネウボラの立ち上げから3年で、乳幼児死亡率が15%から3%にまで減るという目覚ましい成果が上がったという。

ネウボラ事業が始まった1922年、同時に導入されたのが **Kiertokori** であり、これは、ボランティアと寄付でベビー服とベビーグッズを用意して、貧しい家庭に貸し出し、赤ちゃんが成長して必要がなくなったら綺麗にしてまた別の家庭に貸し出すというサービスである。**Kiertokori** はその後、「育児パッケージ」として贈られるようになった。現在は、赤ちゃんが生まれた家庭の3分の2が育児パッケージを貰い、3分の1が、育児パッケージの代わりに貰うことができる現金約2万円を選択して貰っているという。

○ネウボラの概要

フィンランド国内のネウボラは、1944年の時点で300か所あったが、現在は900か所にまで増加している。利用率としては、今現在、妊婦の99.7%、子どもの99.5%がネウボラを利用して、経済的な格差に関わらず全ての家庭がネウボラを無料で利用することができる。利用者数に関しては、2018年には36000人であったが、利用回数の延べが15万8000回であることから、同じ人が繰り返して来ることが分かる。また、ネウボラの調査によると、利用者の91%が、ネウボラの存在が子育てにとっても役に立ったと答えたという。予算も増加傾向にあり、2019年は1600万ユーロとなっている。担当者によると、2020年は更に増える予定で、移民の増加が理由となっているという。

これらの利用者に対し、ネウボラでは3人の医師と114人の保健師が対応している。また、学校および学生の健康サービスにおいては、2人の医師と76人の保健師が携わっている。利用者数と比較すると少ない人数ではあるが、効率良く運営しているという。

○ネウボラの利用について

表1. 妊娠中におけるネウボラの利用の流れ

(ESPOO ESBO “Maternity and Child Health Care”スライドより著者翻訳)

妊娠6～7週	ネウボラに電話
妊娠8～10週	保健師と面談
妊娠9～14週	保健師による超音波診断+遺伝子検査
妊娠18～22週	医師による超音波診断
妊娠22～24週	保健師と面談
妊娠30～32週	保健師と面談(第1子の場合)
妊娠35週	医師と面談
妊娠37・39週	保健師と面談
41週以上の妊娠	保健師によるモニタリング

表1は、通常の妊娠の場合に、ネウボラを利用してどのような経過を取るかを示している。フィンランドの子育て支援が、日本や他のヨーロッパの国と比べて異なるのは、妊娠中から支援を始めることである。面談は基本的に予約を取って行われ、利用者は8時から15時の間にオンラインで予約を取ることができる。予約なしでも来られるオープンネウボラもあり、毎日9～12時に開いていて、緊急の際に

はいつでも来られるようになっている。他にも、テレホンサービスやネウボラチャットもあり、気軽に相談しやすい環境が作られている。

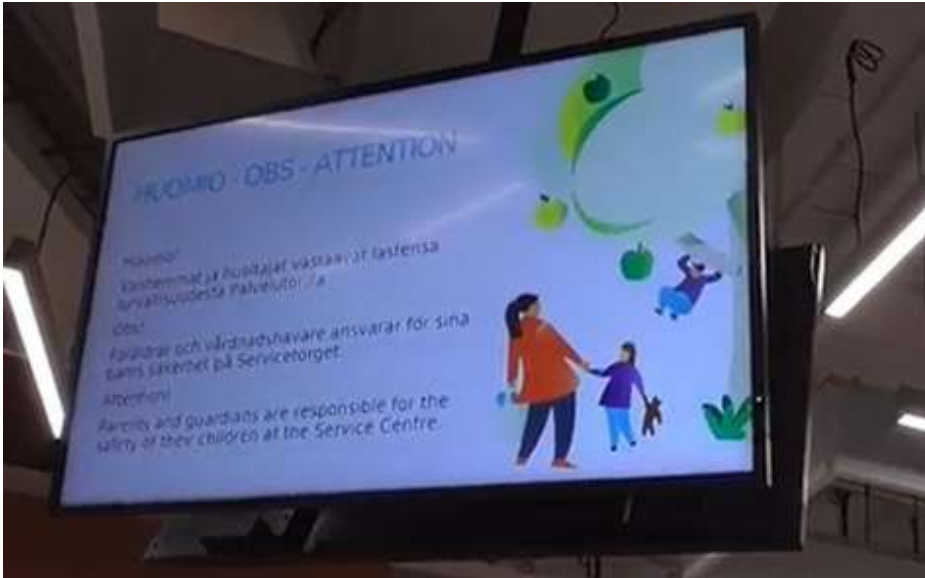


図2.予約した利用者の呼び出しをするスクリーン。名前は表示せず保険証の番号で呼び出され指定された番号の面談室に入る。



図3.説明者の Minna さん。奥は相談室

また、糖尿病、高血圧などの妊娠性の病気や、ストレス、貧しくてお金がない、家族と上手くいっていないなど、特別な要件に関しても相談をすることができる。更に、妊婦の世話をするだけでなく、経済状況や失業などの、家族全体の問題にも対応する。その際、深刻な問題の時には、保険会社とも連携を図るといふ。ただし、ネウボラはあくまでも予防ということが主眼であり、ヘルスセンターではないため、子どもや母親が病気になった時には別な施設に行ってもらふこととなる。

赤ちゃんが生まれた後は、産後3か月までは母親と子どもの両方の健康状態を見る。それ以降は、母親は支援の対象外となり、子どもが対象になる。妊娠中はマタニティーネウボラが支援を行うが、子どもが対象になると、子どもネウボラが支援を行うようになる。

表2. 1歳未満の子どものネウボラ利用の流れ

(ESPOO ESBO “Maternity and Child Health Care”スライドより著者翻訳)

出産直後	ネウボラに電話。第1子の場合、ネウボラのスタッフが家庭訪問。 第2子以上の場合、母子がネウボラを訪問。
生後2～4週	子どもの健康診断
生後6週	医師による健康診断
生後3・4・5・6・8か月	保健師・医師による健康診断

表2は、1歳までの赤ちゃんがネウボラを利用する流れを示している。赤ちゃんは生後3週以降、毎週診察してもらい、その後は2週間に一回の診察となる。また、生後3か月以降は、月1回の診察を受けている。

表3. 1歳から6歳までの子どものネウボラ利用の流れ

(ESPOO ESBO “Maternity and Child Health Care”スライドより著者翻訳)

1歳	健康診断
生後18か月	広範な健康診断＋保健師・医師との面談
2・3歳	健康診断
4歳	広範な健康診断＋保健師・医師との面談
5・6歳	健康診断

表3は、1歳から6歳までの子どもがネウボラを利用する流れを表している。子どもは、6週目、4か月、1歳半、4歳の時に、必ずネウボラで医師からの診察を受け、学校に入るまでに4回、医師に診てもらふことになる。また、保健師とは、学校に入るまでに16回から18回診察や面談を行う。子どもに対して、医師よりも保健師の関与が大きいところがフィンランドの子育て支援の特徴である。



図4.ベビーカー置き場(手前)と授乳コーナー(奥)

また、子どもネウボラにおいても、子どもだけでなく家族全体の世話をし、社会福祉士などと連携して支援を行うこともあるという。予約を取る時間はそれぞれの家庭と子どもが決めることができ、1人の保健師が1家族に対応する、という1対1の関係を取っている。妊娠の時期から子どもが生まれて6歳になるまで同じ保健師が子どもとその家族の面倒を見ることとなる。

保健師は、家族からの相談内容に合わせて指導を行っている。ネウボラに寄せられる親からの相談で多いこととしては、健康状態、福祉に関わること、しつけ、子育てに関わるものが挙げられるという。これに対し、保健師は、例として、歯の生え方を診たり、スポーツや生活リズムに関することを指導したりということを行う。説明担当者は、必ず毎日2時間外遊びをさせるということが、人間関係やメンタル面に良いと話していた。また、家庭の財政状況や虐待、薬物中毒などに関する相談にも対応しているという。

○子どもネウボラ以外の子ども向けサービス

ネウボラを利用する子どもの内、80%は子どもネウボラを利用しているが、10%は家庭ネウボラという別のサービスを利用している。これは、子育てが極めて困難である場合に利用されるものである。また、5%の子どもが、家庭ネウボラよりも更なる支援と養護を行うサービスを受けている。他にも、ダウン症や重度障がいのある子どもに対する障がいサービス、メンタル面でのケア、家庭内暴力に対応するサービス等もある。

○就学時以降の子育て支援

ネウボラの支援は6歳までを対象としており、学校に就学してからはスクールナースによる健康管理が支援を引き継ぐこととなる。スクールナースは、学校での子どもの怪我などに対応するだけでなく、ネウボラと同じように、家族全体の支援を行う。また、子どもの知能や苦手分野などに関する評価や審査も行っている。

○付随サービスについて

フィンランドの子育て支援に関する情報は、オンラインでも確認することができる。エスポー市のホームページでは、子どもネウボラと学校の健康管理体制の両方に関して様々なイベント情報を発信したり、同じような立場の人達の交流イベントの案内をしたりしている。例えば、10代で妊娠して親になっ

たような人に対しても、仲間同士でのケアサポート体制を作っているという。

○今後の課題

Iso Omena Service Centre のネウボラでの今後の課題は、オンラインサービスを充実させることであるという。また、セルフヘルスケアをもっとオンラインでできるように充実させていきたいそうである。現在も、ウェブページで、マタニティーハウスや子どもハウス、薬物中毒ハウス、アルコール中毒ハウスなど、自分に必要なところをクリックすると、自分の状態を自分でテストし、その結果を見て次の行動に繋げるといったページがあるが、そのような自己診断をさらに充実させていきたいという。

また、ネウボラのサービスセンターの数を増やしたいとも考えており、エスポー市には今後、4か所のサービスセンターが作られる予定であるという。更に、Iso Omena Service Centre のネウボラと同じような形態の施設 Kalajärvi の地区にも建てられた事例もあり、福祉や教育など、様々なサービスを1つの場所で受けられるような体制を作りたいと話していた。

【所見】

今回、ネウボラを視察したことにより、フィンランドが子育て支援をいかに重要視しているかを感じることができた。また、妊娠中から手厚いサポートをしていることや、当事者だけでなく、家族の支援もしていること、就学後にも支援を引き継いで続けていく体制が整っていることなど、利用者を第1に考えた支援を行っているように考えた。日本でもフィンランドの子育て支援体制を参考にすることは、少子化が問題視されている現代において、その解決策を考える上で重要になると感じた。

<参考文献>

- ・ ESPOO ESBO “Maternity and Child Health Care” スライド



7-3 イソ・オメナ図書館

日時	2020年2月10日(月)	14:00~15:00
訪問場所	イソ・オメナ図書館 (Iso Omena Library) Piispansilta 11, 02230 Espoo	
訪問先担当者	Anu Miettinen (カスタマーサービスマネージャー)	
視察目的	フィンランドで最も利用者数が多いとされるイソ・オメナ図書館のサービス内容を視察することで、利用者目線に立って作られた図書館の在り方を探る。	
記録者氏名	佐藤 真実	

【視察概要】

イソ・オメナ図書館は、2016年に開設された施設で、Iso Omena Maternity and Child Health Clinicと同じく Iso Omena Service Centre の建物内にあり、ショッピングセンターに併設された施設となっている。図書館はサービスセンターの総面積の61%を占めている。地下鉄がイソ・オメナの地区まで伸びてきた際に、サービスを区別せず、利用者目線で共通に利用できるようにと、戦略的にサービスセンターが作られたという。図書館の開館時間は、平日が8時から21時、土曜日が10時半から18時、日曜日が12時から18時となっている。



図1. 図書館から見たサービスセンターの建物内の様子

イソ・オメナ図書館はフィンランドでは一番利用率が高い図書館であり、2019年には150万人が利用した。その理由の1つは、サービスセンターの建物1つの中で様々なサービスを受けられるため、他の用事でセンターを利用した人が図書館にも訪れやすいということも含まれると考える。しかし、それだけでなく、説明者が話していたように、イソ・オメナ図書館は、エスポーにある他の17の市立図書館とは全く違った特徴を持っているということにも、利用率が高くなっている理由があると考えられる。

○イソ・オメナ図書館の概要

イソ・オメナ図書館があるエスポー市は、他の3市(ヘルシンキ、ヴァンター、カウニアイネン)とともに「ヘルメット図書館(HelMet)」³という図書館ネットワークで繋がっており、この範囲の図書館で

³ ヘルシンキ都市圏図書館(Helsinki Metropolitan Area Libraries)を指す。

あれば、借りた資料を、借りた場所と異なる図書館に返却したり、所蔵していない資料を他の図書館から取り寄せたりするサービスを行っている。また、本や CD の貸し出し以外にも、利用者からの要望に合わせて様々なサービスを提供しており、この図書館では司書を図書館教育者という呼び方に変えて、学び方を教えるということを重視しているなど、図書館サービス全体を教育の一環として捉えているようである。



図 2. 図書館職員のベスト。

職員はベストかバッグのユニフォームを着用し、一目で見て職員だと分かるようにしている。

・若者向けのコーナー(VOX)

VOX は、若者が利用しやすいように設けられたコーナーであり、12 歳から 20 歳までを利用対象としている。14 時までは学校から訪問した子どもたちのための部屋になったり、赤ちゃんと母親が映画を観る場所になったりしている。14 時以降は、自由に若者に開放されているスペースになっていて、友人と話をしたり、ボードゲームなどで遊んだりすることができ、若者にとっての憩いの場として利用されている。



図 3. VOX の入口

また、エスポー市は地域間格差が大きく、様々な問題を抱えている子ども達も利用し、時々感情が爆発するような時もあるという。そのため、スタッフが VOX に入って子ども達のサポートやケアも行っている他、警察や治安維持を行う団体とも協力をしながら、安心・安全で信頼できる場所づくりを目指

している。

・子どものコーナー

子どものコーナーには絨毯が敷いてあり、子ども達は靴を脱いで過ごしている。赤ちゃんがハイハイしやすいように、ということも考慮されているそうである。ネウボラの待合室としても利用されている。また、図書館というと静かにしなければならないというイメージがあるかもしれないが、ここは賑やかな場所になっている。さらに、資料は多言語対応になっており、幼稚園や学校の先生と児童図書対応の司書との密接な連携も行われている。

子どものコーナーを担当していたトミーさんは、ほぼ毎日、幼稚園や学校からの団体をもてなし、ブックトークや読み聞かせをして、本を好きになってもらえるように努めていると話していた。トミーさんはまた、工房でのコーディングやロボット作り、工作なども指導しているそうである。

・モノづくりスペース(カヤ)

ここでは、3Dプリンター、ビニールカッター、熱転写など、様々な道具を無料で使用することができ、利用者が自由な発想で学び、活動や実験を行い、色々な物を作ることができるようになっている。3Dプリンターに関しては、材料に対応したプリンターを利用できるように異なった種類のプリンターを用意している。



図4. メーカースペースの3Dプリンター



図5. 3Dプリンターを使って作られた作

子どものコーナーにいたトミーさんはここで子ども達に対して指導を行っており、過去には、小さい缶に想像上のモーターを作って、デコレーションを自由にさせ、それを基にお話作りをするという活動を行ったという。トミーさんが物語の最初の場面設定(宇宙、恐竜時代、ジャングルの中など)をしてその後の話を、作ったものに従って子ども達が自由に作っていったそうである。また、7年生以上の子どもはipadを使い、デジタルストーリーを作ることもある。イソ・オメナ図書館ではスタッフが現代的な科学技術を駆使しており、様々な活動ができるようになってきているという。



図6. プログラミングを教えるためのロボット

図6は、ロボットのテクノロジー(ロボテク)を学ぶためのビーボットである。スタッフがこのロボットを使って幼稚園生にプログラミングを教えており、動く道を作ってあげて、その通りに動かすにはどうしたらいいかを子どもに教え、自分でプログラミングさせるそうである。幼稚園生には丁度いい難易度で、使い始めだけを図書館のスタッフが教えて、その後は自由に機械を使わせることで、ロボテクに親しむようにしている。

また、幼稚園や学校の子供達を団体で招待することもあり、まず道具の説明をして、どのようなことができるか教えた後、子ども達に自由に利用させているようである。中には何度も来て機械の使い方が熟達している人もいるが、スマートフォンなどの自分のコンピューターの使い方が分からないという人が個別で来ることもあり、そういう人にも司書が教えている。

モノづくりスペースには、ミシンも設置してある。説明者によると、引っ越してカーテンが作りたいなど、それだけのためにミシンを買うのは無駄なため、ここに来てカーテンを作るなどしている人もいう。手芸関係については、ワークショップも時々やっている。



図7. ミシンコーナー

他にも、木工のスペースもあり、中にはレーザーカッターが置いてある。ここは18歳以上で研修を受けた人しか使えないそうである。また、電気のこぎりの貸し出しなども行っている。

・音楽コーナー

音楽コーナーでは、防音室の中に録音やミキシングができる機械がある他、ステージでコンサートを開くことができるようになってきている。今まではCDの貸し出しがよく行われていたが、最近はほとんど

CD が借りられなくなっているため、図書館としてこれ以上新しい CD は買わず、実践的・体験的に音楽に触れることができるサービスを始めることにしたという。また、ここにはウクレレクラブやドラムのクラブなどもあり、趣味として楽器を楽しみたいと考える人達が気軽に来られるようにしている。

説明者は、音楽へのアクセスが気軽にできるようにすることも、図書館の義務の1つであると話していた。イソ・オメナ図書館には音楽教育学を学んだ司書もいるため、利用者のサポートもできるようになっていて、図書館が持つ教育機能の1つである「音楽」に気軽に親しむことができるように工夫されている。



図 8. 音楽ステージ

・本のコーナー

このコーナーは静かに本を読んで過ごすスペースで、音楽コーナーとスペースを区切っており、音楽コーナーでコンサートなどをして読書コーナーは静かになるようにしている。

本棚の1つに、HelMet 読書チャレンジの棚があった。これは、あなたの年齢よりも古い本、ハッピーな本などのテーマに沿って自分で本を探してブックリストを作り、それを読んでいくという取り組みである。子ども用のリスト作りイベントもある。訪問した週のテーマは、最初と最後のスペルが同じ本を探すことであった。本棚の上にテーマに関するチラシが置いてあり、その下の棚にそのような本が置いてあった。この取り組みは、本が好きな人達が利用しているものだが、テーマの本について意見交換するフェイスブックも作って、仲間同士で情報交換も行っているという。また、音楽や映画の分野でも同じようなリスト作りがされている。このイベントは、次のテーマは何になるかという問い合わせもある程、毎回楽しみにされている人気のイベントであるという。

・学習室

図書館は勉強する場でもあるため、特に学校の子達を対象に、学びの場を提供している。高校生は3月に卒業試験があるので、訪問時は必死に勉強する姿があった。また、高校の卒業試験はコンピューターで入力する形式のため、対策の勉強としてパソコンを持ち込みしている人が多いそうである。一日中学習室で勉強している人もいるという。



図 9. 学習室の様子

○移民・難民向けサービス

フィンランドでは 2015 年に難民や移民が増加したが、その時、図書館が、そのような人たちを最初に歓迎する場となった。まず、難民収容所に移動図書館を持って行き、そこで、フィンランドでどんなことができるかを教えたり、フィンランド語を学べたりするような機会を作った。その後は、難民申請中の人達に色々なサポートを行い、その後、エスポー市の全ての図書館の取り組みとして、図書館に移民や難民を招待して、フィンランド語の入門講座を行った。

説明者によると、難民申請が許可された人達からは、フィンランドの公的な制度に関する質問がとて多くなったという。それに対し、図書館では、書類の書き方や仕事の探し方など、役所に行くための指導を行ったという。

現在は、難民増加時から数年経ち、何度も繰り返し相談しに来る人達もいるが、図書館の職員は公的な指導が専門ではないため、既に習った人が別の人に教えるという自助努力をするように指導しているという。また、公的な申請はオンラインでもできるようになっているが、デジタルディバイド⁴がある状況のため、それを失くすことが図書館の仕事であると話していた。

多言語のサービスとしては、エスポー市内の他の図書館では、英語、ロシア語、ヒンディー語、中国語、アラビア語、スペイン語など、様々な言語での読み聞かせをボランティアの人が行っているそうである。

【所見】

今回視察を行った中で、イソ・オメナ図書館は、あらゆる目的で来館する人を歓迎し、どの人にとっても自分の居場所となる空間を提供していると感じた。また、それぞれのサービスの良さを最大限に引き出せるように、スペースを区切るなど施設の環境に工夫を凝らしていることも分かった。イソ・オメナ図書館の利用率が高いのは、図書館のサービスを限定せず、利用者の要望や趣向に合わせて柔軟に環境を整備しているためであり、そのような多様なサービスがあるおかげで、図書館に足を運び、根本的なサービスである読書への誘致にも繋がっているためであると考えた。デジタル化が進み、電子書籍の増加などがある中で、図書館に足を運ぶことの意義や図書館の今後の在り方を考える機会になった。

⁴ インターネットを利用したり使いこなせる人と使うことができない人の格差を指す。

7-4 オタニエミ高校

日時	2020年2月10日(月)	16:00	～	16:30
訪問場所	オタニエミ高校 (Otaniemen lukio) Tietotie 6, 02150 Espoo			
訪問先担当者	Kristiina Erkkilä さん(エスポー市国際部)			
視察目的	<ul style="list-style-type: none"> ・ 建築デザインに特徴があるので、それを見学する ・ 教育環境・設備が日本とどのように異なっているかを学ぶ 			
記録者氏名	渡辺彩花			

☆オタニエミ高校の学校概要

オタニエミ高校(図1)はAalto大学の一部で、数学・自然科学に力を入れていた olarin lukio (オラリ高校)、演劇・メディアに力を入れた Pohjois-Tapiolan lukio (ノース・タピオラ高校)の2つの高校が統合して2019年8月に地下鉄のAalto大学駅近くに来た、とても大きな高校である。

この高校では、一般的な学びが受けられる総合科コース、数学・自然科学に特化したコース、演劇・メディアに特化したコースの3つのコースが提供されていて、エスポー市で最も幅広いコースが提供されている高校である。また、授業によってはAalto大学との連携した学びも行われている。

図1：オタニエミ高校の外観



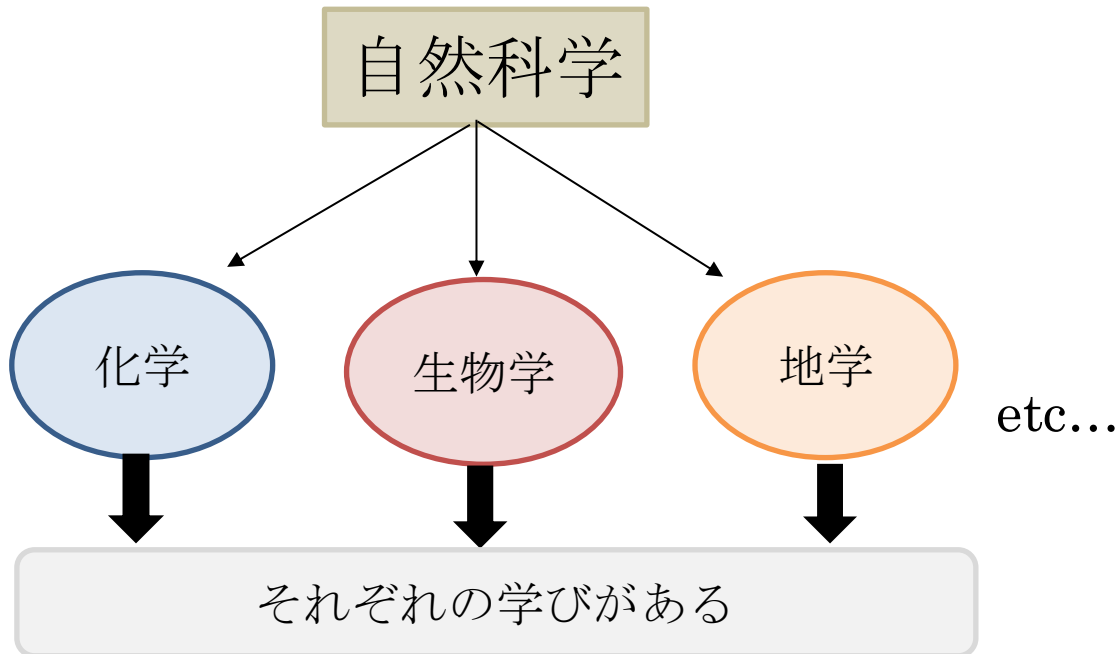
図2：オタニエミ高校のシンボル



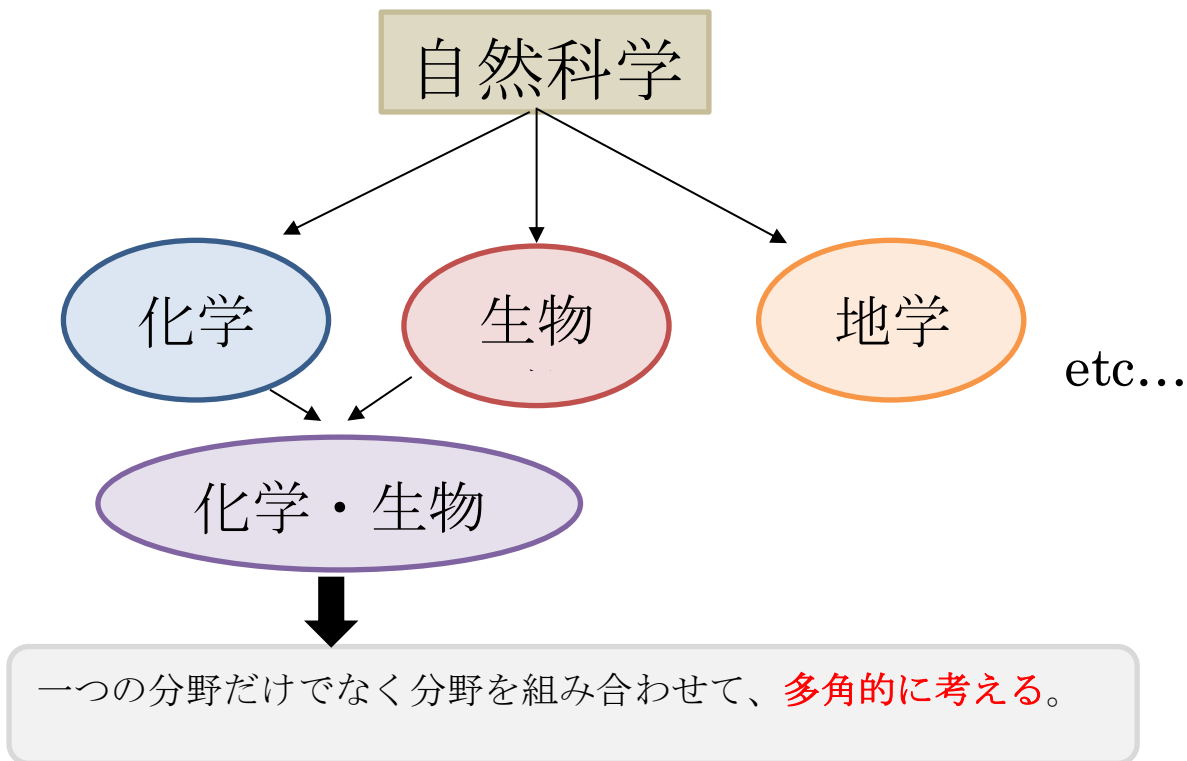
☆高校での学びと学習環境

オタニエミ高校では特に数学・自然科学に力を入れていて、数学・自然科学などのコンクールにおいても毎年優秀な成績を収めている。その理由としてオタニエミ高校での学び方が鍵となっているのではないかと私は考えた。それについてお話をもとに以下の図で例として自然科学を挙げて説明する。

〈一般的な高校での学び〉



〈オタニエミ高校での学び〉



校内は全体的に明るくカラフルで1階から2階から1階を見渡すことができるような開放的な設計となっていた。そして、教室は全体的にガラス張りになっている教室が多く見受けられ、高校とは思えない設備・環境だと感じた。(図3, 図4)

図3：化学室



図4：生物室



他にも生徒が使用するラウンジ(図5)では、生徒一人ひとりがリラックスできるように様々な形をした椅子があったり、宿題・勉強ができるスペースがあったり、気分転換できるように卓球台が備え付けられていたり、自分にあった形で学習したり、リラックスできたりするような空間がとても印象的であった。

図5：生徒用ラウンジ



また、中には生徒が考案したものもあった。(図6)これは正面玄関入ってすぐのところにある、ブランコのようにになっている椅子である。みんなで座らせてもらったが、このような椅子もリラックスできる一つであり、生徒のニーズを学校側がきちんと受け止め、検討した上で実現できるものを取り入れていれているということを見ることができた。

オタニエミ高校を見学してみて、学習に関しては、ある側面からのみ見るのではなく、色々組み合わせてみるなどして多様な視点からものごとを考えて、学びを深めているということが分かった。また、学習方法だけでなく、学習環境にも力を入れているということを知ることができ、改めて学習環境の重要性についても考えることができた。日本の学校であれば生徒が考案したものが反映されるということは、どうしても難しいが、オタニエミ高校では生徒のニーズに耳を傾け、生徒と一緒に学校を創っていくという印象を受けた。

図 6 : 生徒が考案したブランコ型の椅子



〈参考文献〉

・ Otaniemen lukio

<https://translate.google.co.jp/translate?hl=ja&sl=fi&u=https://otaniemenlukio.fi/&prev=search%EF%BC%883> 3月6日参照

・ EspooEsbo Otaniemen lukio

[https://www.translatetheweb.com/?from=en&to=ja&ref=SERP&dl=ja&rr=UC&a=https%3a%2f%2fwww.espoo.fi%2fen-US%2fChildcare and education%2fGeneral upper secondary education](https://www.translatetheweb.com/?from=en&to=ja&ref=SERP&dl=ja&rr=UC&a=https%3a%2f%2fwww.espoo.fi%2fen-US%2fChildcare%20and%20education%2fGeneral%20upper%20secondary%20education) 3月6日参照

7-5 アールト大学

日時	2020年2月10日(月)	16:30~17:00
訪問場所	Aalto University アールト大学 (Otaniementie 9, Espoo)	
訪問先担当者	Kristiina Erkkilä(エスポー市国際部)	
視察目的	アールト大学の建築デザインや大学の環境を視察し、フィンランドの大学の様子について理解を深める。	
記録者氏名	佐藤 真実	

【視察概要】

今回の訪問では、澤野先生のご友人である Kristiina Erkkilä さんにご案内いただき、アールト大学の建物と大学図書館の内部、そして大学キャンパス内に併設されているオタニエミ高校の視察を行った。

アールト大学は、ヘルシンキ工科大学、ヘルシンキ経済大学、ヘルシンキ美術大学を統合して 2010 年に作られた大学である。キャンパス内の建物は、ヘルシンキ工科大学の卒業生である建築家のアルヴァ・アールトによって設計・デザインされた。外壁は主に赤レンガを使用した重厚な造りになっている。また、キャンパスは地下鉄の駅やショッピングセンターとも直結しており、利便性の高い施設となっている。



図1. Undergraduate Centre の建物。
中には理学部の講義室や食堂などがある。

視察では、キャンパスの建物外部の様子を見た他、Harald Herlin Learning Centre にある大学図書館を訪問した。大学図書館は学生だけでなく一般の人でも入ることができるようになっている。図書館内部の設計や照明などの装飾などについてもアルヴァ・アールトがデザインしたもので、ボルドー色の床とその色に映える白のペンダントライトが印象的であった。



図2. 大学図書館の内部

建物は3階建てで、1階がインフォメーションセンター、2・3階が図書館になっている。図書館はくつろいで過ごすためのハンギングチェアやボールチェアなどがあるスペースと、本棚やテーブル、イスがある作業スペースがあり、利用者自身が過ごしやすい場所を選んで、読書や勉強などをして過ごす

ことができる。案内していただいた **Kristiina** さんは、図書館の環境が充実していると、来るのが楽しくなり、それが学習のモチベーションになると話していた。



図3. くつろぎスペース。
壁に穴が空いており、
その中に座るなどして過ごすことができる。



図4. ハンギングチェア



図5. 作業スペースと本棚

また、くつろぐスペースの側には VR を作成・使用できるコーナーがあり、エスポー市のイソオメナ図書館と同様に、多様なサービスを提供している空間になっていた。



図6. VR映像を作成するスタジオ



図7. VRを体験するコーナー

【所見】

アールト大学では主に図書館のデザインを視察したが、イソオメナ図書館と共通していることとして、利用者目線に立ち、利用者が長時間過ごしやすいような空間づくりをしていると考えた。図書館という1つの空間であっても、場所によって、ゆったり過ごせるようにしていたり、勉強がしやすいようにしていたりと、利用者を使い方を委ねた場所であると感じた。また、案内していただいた **Kristiina** さんがお話ししていたように、デザインや空間作りが工夫されていると学習のモチベーションにも繋がるということで、大学という教育機関において、図書館はそういった場所であるべきだと考えさせられた。

Day 8 (2月11日)

8-1 スタディーツアー最終日

この日は北欧スタディーツアーの最終日でした。日本へ向かう飛行機が夕方であったため、ほぼ半日自由時間でした。少し足を延ばして食事や買い物に行ったりと、各自有意義な最終日を楽しみました。ホテルの近くに kiasma 現代美術館があり、私はそちらへ向かいました。美術館はモダンな造りになっており、なかなか日本にはないような展示品が多く、目に入るもの全てが新鮮に感じました。時間が経つことを忘れて見入ってしまう美術館でした。

そして翌日の12日の朝に無事に日本に到着しました。事故や怪我もなく2020年の北欧スタディーツアーは終了しました。(齊藤萌奈)



ヘルシンキ市中央図書館 Oodi



Kiasma 現代美術館



ヘルシンキ・バンター空港のモニュメント

III. 個人感想文⁵

全ての人に開かれた社会環境

教育学専攻 3年 佐藤 真実

今回は、北欧教育視察旅行に参加し、乳幼児に関する相談施設から成人向けの教育機関まで、幅広い年齢の人を対象とした教育施設の実情について知ることができた。視察を通して実感したこととしては、スウェーデン、フィンランドの両方において、社会全体が市民一人ひとりを尊重し、平等を実現すべく、全ての人が教育を受け、健全に育つことができる環境づくりを目指しているという点が挙げられる。

私は特に、子どもを妊娠した段階から子育てについて相談できる施設であるネウボラと、成人に向けた教育機関であるフォークハイスクールは、日本ではあまり行われていない取り組みであると考え、印象に残った。

ネウボラに関しては、妊娠時から同じ看護師が継続して母親と対話する中で信頼関係を育み、子どもが生まれた後も、子どもの生育記録を取って、その後の学校に記録を引き継ぐということが行われており、子どもを守る社会体制が構築されている。これは、少子化社会といわれ、子育てしやすい環境づくりが必要とされる日本でも、参考にすることができる取り組みであると考えられる。

フォークハイスクールでは、社会人や学校を中退した人、また、シニアなど、様々な人に対して教育を受ける機会を与えており、学ぶ意欲があればいつでも学校に通えるチャンスがあるという取り組みである。これと比較して日本は単線型の学校制度であり、中学以降の学校卒業後には社会人となるのが一般的であるため、卒業後に学び直す機会が北欧ほどは与えられていないと考える。しかし、社会に出てから自分に足りない能力や知識を身につける必要性に気付くこともあるかもしれない。そのようなタイミングで自由に学びを得られる機会があることで、国を支える人材の質がより高まり、国の更なる発展も期待できると考えた。

また、学校のみではなく、今回の視察では、公共図書館にも訪問した。公共図書館では、本の貸し出しにとどまらず、大規模の図書館では青少年が集まって遊ぶためのコーナーや工芸コーナーが設置されていたり、地域に密着した小規模の図書館では、移民や難民に向けた言語講座が開催されていたりと、図書館に関心を持って足を運んでもらうような取り組みが見られた。さらに、滞在中、個人的に訪問したヘルシンキ中央図書館(Oodi)では、自然光を多く取り入れた大きなガラス窓や、間接照明、座り心地の良い椅子など、居心地の良さを追求した環境作りが細部にまで施されていたと感じる。



図1 イソオメナ図書館のゲームコーナー



図2 ヘルシンキ中央図書館のボールチェア

これらの取り組みによって、公共図書館は、乳幼児から高齢者まで、また、性別や立場などを問わず、全ての人が自分のために利用できる施設となっているように考えた。生涯学習、多文化社会、平等な価値観など、北欧全体における理念の集大成と言えるような公共図書館の姿を見ることができたように思う。

⁵ 学生の学年表記は令和元年度のものである。

差し伸べる手

教育学専攻3年 齊藤萌奈

2020年北欧スタディーツアーが終了しました。この度スタディーツアーに参加した理由としては、以前から興味を持ちつつあった日本と諸外国の教育の比較を実際に目で見たいと思っており、中でも教育先進国だといわれている北欧諸国に行けること、また、ジェンダーギャップ指数が高い北欧諸国の社会の構造が一体どのようなものであるかという点について関心を持っていたからです。

9日間でスウェーデン、フィンランドと二か国をめぐり、様々な場所を見学した中で共通して感じたことは、子どものことを一番に考えているということでした。どのような子どもであっても尊重し、差別をしないこと。子ども一人一人と向き合い子どものことを知るよう学校で教師が努めていること。子どもそれぞれに合わせた教育を行っていること。そしてこれらの結果としての子どもの基本的な人権を国際的に保障するために定められた子どもの権利条約のスウェーデンでの法律化です。中でも特に多様性や平等に至るところで感じたように思います。性別、生まれた国、話す言語、肌の色、宗教、家族形態など自分と他者が違うことは当たり前のことであり、これらを差別するのではなく互いを理解し、何より共に生きていくということが社会全体の基盤になっているように感じました。また、子ども自らに考えさせて行動させる、いわゆる手を離して目を離さずといったような教育方法も一見簡単そうで難しく、大人が子どものことを信じているからこそ実現できることだと感じました。

普段日本に住んでいると基本的には日本人と関わる機会が多いと感じます。ここで述べた一般的に考えられている日本人とは皆肌の色など見た目には差はあまりなく、日本語を話している人という特徴が挙げられるのではないのでしょうか。個人的な意見なのですがこのスタディーツアーの期間中、現地の方からスウェーデン人は～やフィンランド人は～といった〇〇人といった単語はあまり出てこなかったように感じます。そもそも世界に住む人々は皆同じ人間のはずなのに、なぜ〇〇人というように区別をするのか。これらの答えは複雑なため今の私にすぐに答えを出すことはできないように思います。しかし今言えることとしては、異なるから排除するのではなく、異なるからこそ手を差し伸べることが大切であると思います。今回のスタディーツアーで出会った子どもも含め世界中の子どもたちが大人になる頃には、従来のような差別がある世界ではなく、互いに異なることは当たり前、互いに手を差し伸べ合えることが当たり前だとする世界を今から私たちが作る必要があると私は考えます。このような貴重な経験ができたことに感謝いたします。



街中のSDGsの看板

“違うことが当たり前”

教育学専攻 3年 武市亜子

私が今回、実際にスウェーデンとフィンランドを訪れて深く感じたことは、“違うことが当たり前”の価値観が社会に溢れているということです。

スウェーデンにある私立ピスリンゲン・ビョーンゴルデン幼稚園では、肌の色が異なる赤ちゃんの人形や、様々な家族のかたちを描いた絵、彼・彼女などの性別で異なる呼称を使わないなど、自身とは異なる他者を肯定する、“違うことが当たり前”の価値観に幼い頃から触れさせる工夫を見つけることができました。今でこそ日本では色鉛筆の肌色を薄橙色と呼ぶようになりましたが、私が保育園に通っていた頃、薄橙色のことは肌色と、先生も、私たち子どもたち全員がそう呼んでいました。

幼い頃に触れた価値観は子どもたちの物事の判断基準に大きく繋がっていくと考えています。自分の肌が薄橙色だから肌色と呼ぶような、常に自分基準で物事を判断していくのではなく、自分以外の他者の存在を踏まえて決断していくことが重要なのではないかと思います。

次に私が心に残ったお話は、子どもの権利擁護団体・BRIS でのお伺いした、子どもたちの死による悲嘆との向き合い方です。卒業論文で死をテーマに扱う私にとっては、よく話を聞くこと(子どもたち自身が遭遇した死へ向き合い、他者に伝えること)が遺族に対する最大のサポートという考え方がとても興味深かったです。「心の中にある課題は常に出さなければならない」からこそ、お墓へ実際に足を運んだり、故人へ向けた手紙を書いたりするなどの取り組みが行われていることが分かりました。

今回のスタディーツアーでは、自身の関心ある内容に加えて、ともに参加した学生の興味ある分野にも触れるきっかけとなり、また新しい気づきをたくさん発見することができました。引率してくださった澤野先生、杉原先生、一緒に学びあった学生みんなに心から感謝申し上げます。





誰もが求めれば学ぶことのできる世界

初等教育学専攻 3年 四宮菜々

今回スタディツアーに参加し、数々の貴重な体験をすることができた。9日間を振り返ってみると、自分の予想の以上の収穫があったことは間違いない。様々な教育機関の視察を行う中で、そこで働く教師や支援の方々の教育に対する考え方にハッとさせられることが何度もあった。スウェーデンとフィンランドの二カ国もおいて多くの施設や学校を回るうえで総合的に感じたことは、すべての人に同じだけの可能性を期待し、誰にでも成功する機会が与えられているということだ。

スウェーデンのシェルブリンクス公立学校はインクルーシブ教育に特化した学校だった。「どんな子どもでも成功できるように、学校にはそのための義務と責任がある。」と校長先生がお話してくださったことが印象的で、教室の環境構成や生徒一人ひとりが自分の学びやすい方法を選択できるという制度や体制が整っていた。また、教員に対する教育も徹底されていた。教員教育が積極的に行われているのはこの学校だけではなく、LGBTQ認定幼稚園や難民の多い小中学校においても教員同士がチームとして動き情報や知識を日常的に共有している様子が見られた。学校や教師の担う責任の大きさを理解し、仕事そのもの、またそれ以上に高い意識を持っているのだと感じた。うまく勉強できない子どもに対しても、母国語や母文化の違う子どもに対しても平等的な教育が用意されていた。

学びとは子どもだけに与えられたものではなく、大人になっても教育を受けられたり学ぶ機会を十分に受けられたりする環境があった。フォークハイスクールをはじめ、街には多くの図書館、美術館や博物館など子どもから大人まで気軽に利用していた。誰もが求めれば学ぶことのできる世界が開かれているということに国という大きな母体が、どこに税金を使い、何を重視するか、ということがこんなにも大きなことだったのかと本当の意味で気づかされた。今まで政治については無頓着なところがあったが自分自身を見直すべきだと感じた。民主主義である日本とスウェーデン・フィンランド。同じ民主主義の国ではあるが幼いころから「自分で選び、自分で決める」という民主主義のプロセスを学び、自然に身についていくことに感心した。また自分の国でも実践できることがあるのではないかと感じた。

そして最後に子どもが学ぶのは学校の授業だけではないということだ。私は、視察をした学校の校長は女性の先生が多かったことに驚いた。副校長は複数いることが多くいずれも若い女性が多かった。比較的高齢男性の職員が校長を務めることが多い日本に対し女性の社会進出や男女平等化が進んでいるのだと感じたし、学校という場とそのモデルがあることは非常に望ましいことなのではないだろうか。そして街のいたるところにあるセカンドハンズショップ、買い物時の袋の有料化等、環境について考える生活が当たり前にあった。子どもたちに勉強をさせるのではなく、考えたいやってみたいと思ってもらうために私たちは働きかけるべきだと思った。

民主主義社会の実現に向けて教育現場では何ができるか

初等教育学専攻2年 長嶺瑞歩

今回の9日間にわたる視察を通じて、北欧の教育は、言語や文化に不慣れな移民はもちろん、精神的な課題等により教育の機会を失った若者たち、人生の再生を誓って学び直しを決意した成人など、すべての人々にひらかれているということを改めて実感しました。今回は、現在日本が抱える課題と比較しながら、「移民に対する教育」と「北欧型の民衆教育」の2つの話題をもとに、それぞれ視察を通じて私が持った意見を述べようと思います。そして最後に、2つの話題に共通する「民主主義」について論じたいと思います。

スウェーデン国民のうちの24%は、「本人が外国から来た」もしくは「親が外国から来た」移民です。こうした移民に対する手厚い言語教育は、学生の8割以上を移民が占める公立学校グリムスタスコーランをはじめ、トゥンバ高校やプリスクールでも行われていることがわかりました。中でもグリムスタスコーラでは、やってきたばかりの移民に対していきなり授業に参加することを強わずに、まずは準備期間として約1か月間スウェーデン語の特訓を受けるシステムが設けられています。しかし、自国の言語を教えるだけが言語教育ではありません。トゥンバ高校では、希望する生徒は放課後に「母語」の授業を受けることができます。こうした配慮を通じて、生徒が「ダブルリミテッド」に陥ることを防ぐことができると感じました。昨今、日本においても外国にルーツを持つ子どもたちに対して、教育現場ではどのような配慮がされるべきかが問題視されています。こうした問題に対して、外国籍の子どもたちの就学義務を早急に設けることと、日本語教員を増やすことで、日本でもあらゆる子どもたちの人権が配慮されるべきだと痛感しました。

次に、「北欧型民衆教育」についてお話ししたいと思います。スウェーデンにあるブロンマ国民高等学校は、成人向けの教育機関です。国内に約150校程あるこの「国民学校」は、スウェーデンの民主主義教育を象徴する存在になっています。その言葉通り、高校を卒業できなかったために大学進学を目指して学ぶ若者や、大学に通いながらこちらで専門的なコースを受講する学生、人生を豊かにするために学びに来るご高齢の方など、それぞれのニーズに合わせた学びの場になっていることがわかりました。このように、いわゆる一般的とされる教育コースから万が一逸れるようなことがあっても、様々な支援を受けながらも一度やり直せるチャンスがあり、かつ目的の異なる様々な年齢の人と一緒に学べる点が、この「国民学校」の最大の特徴だといえます。近年日本では、いじめ等を理由に不登校や引きこもりになる子どもたちが問題になっており、こうした子どもたちのための居場所として「フリースクール」や「フリースペース」などが注目されていますが、これはあくまで居場所であるので、多様な人と出会える機会が少ないことがしばしば指摘されています。またこのような現状は、子どもたちの市民性の欠如を招く危険性があると感じます。今回の視察を通じて、「国民学校」のようにすべての人々が成功のチャンスをつかむことができる場こそ、民主主義社会において最も重要であると感じました。このように、現在日本で注目される「子どもたちのニーズに合わせた学び舎作り」には、「北欧型の民衆教育」の特徴とされる「市民性を育む場」としての機能を取り入れるべきだと感じました。

今回の視察では多くの教育機関や施設を訪問し、様々な責任者や担当者からお話を聞く機会がありましたが、そこで繰り返し強調されていた言葉があります。それは、「民主主義」というワードです。北欧型の教育では、子どもたち自身が物事を決めることや、どんな子どもでも参加しやすいようなユニバーサル化された授業が大切にされています。このことは、「民主主義社会の実現に向けたプロセスと一緒である」からこそ教育現場でも大切にされるべき理念なのだそうです。さて、私たちは日本の学校説明会で、「民主主義」という言葉を一度でも聞いたことがあったでしょうか。日本の学校教育は「民主主義」という視点が抜け落ちてはいないでしょうか。これは、前述した2つの課題にも共通する視点だと感じます。このように、北欧型の教育に象徴される「あらゆる人の様々な目的に合わせた柔軟な教育内容」の実現が、日本の教育現場で求められていると感じました。

ひとりひとりが輝ける環境作り

教育学専攻 2年 品田真優

ひとりひとりに寄り添い、全ての子どもたちや学びたい！と思う全員が輝けるような環境が作られていること。私がこのスタディーツアーの中でどこの施設に訪れた際にも共通して1番感じたことである。授業やある1冊の本を通して教育学科に入ってから更に興味を持つようになった北欧の教育。とにかく“平等”というイメージが今まで強かった。しかし実際には幼稚園から大人も学べる国民学校まで、ただ“平等”なだけではなかった。1つの円で表現するとしたらその円の中心には必ず子どもたち（学ぶ者たち）がいて、その回りを教師や大人が円の中心を輝かせるために優しく囲んでいる、そんなイメージを私は持った。「どんな子どもでも成功できるようにしなければならない」「授業中にフォローできなかった子に対しては別の時間に違ったアプローチで支援する」「ひとりひとりのカギを見つけるのが大切」公立シェルブリンクス学校で先生方がおっしゃっていた言葉が印象的である。同じ教室で同じテーマの授業をするのでも、ひとりひとりに合わせた教育を行う。成績だってその子に適した方法で評価してつける。それに対して、日本では勉強すること・学ぶことそれ自体が目的化されてしまっている気がする。学習指導要領をベースにして一斉教育を行い、成績も学力を点数化することによってつけることがほとんどであろう。実際に授業見学をさせていただく中でもそんな日本の教育とは異なる環境を目の当たりにして素直にすごいな、と心から感じた。そして学校だけではない。例えばネウボラにおいても、同じ看護師が長期間に渡って何でも話せる信頼関係を築きながらひとりひとりに手厚いサポートがなされていることに驚かされた。

また、このような環境づくりは先生方の働きがけはもちろんであるが、そもそもの学習環境の構成や教室などのデザインを重視しており、学びたいと思うような引き出しが北欧には確かに沢山あるからこそ作り出せるものだと実感した。日本で同じ教育をしようと思っても現実的に人口やお金の使い道も違うので不可能なのかもしれない。しかし全員一緒のスタイルで学ぶことが必ずしも良いことではないという心づもりを持つこと。さらに **Brain break** を取り入れたり幼稚園のように教室の環境から子どもの力を引き出したりといったような小さな取り組みなら日本でもいくらでもできると感じたし、もし将来教育現場に立つことがあればすぐにでも実践したいと思う。

恥ずかしながら初めて海外に行くということもあり、訪問前も訪問中も正直不安と緊張でいっぱいだった。しかしそれ以上にここには書ききれない程の学びと自らの将来について考えるきっかけをいただいた。普通なら経験できないようなこの貴重な体験や得たものをこれから新たな学びを積み重ねる中でも常に心において成長していきたいと思う。お世話になった全ての方々に感謝の気持ちでいっぱい。本当にありがとうございました。



グループ学習の様子

日本とは違った教育観を感じた 9 日間

初等教育学専攻 2年 渡辺彩花

教育学科所属となって約 1 年、授業でフィンランドやスウェーデンの教育制度が注目されているという話を聞くことが多かった。日本と同じ単線型の学校制度を取っているなど、同じ面もあるが、どうして注目されるようになったのかが気になり、実際に自分の目で確かめてみたいと考えたため、この北欧スタディーツアーに参加した。まず、私がどちらの国でも感じたことは日本以上に子どもを第一に考え、その子ども一人ひとりの「個性」に焦点を当て、大人になるまで、また大人になってからも学びの機会を提供しているということが日本との大きな違いであった。私がこのスタディーツアーで印象に残った学校はシェルブリンクス学校である。この学校は特に障がい児と健常児の統合教育、インクルーシブ教育に力を入れている学校であった。日本では個に応じた教育というより、みんなと同じにすることが一番平等であると考えられていることが多く、その子どもの個性に目を向けるような教育を行っている学校は少ない。特に普通学級にいる障がい児に対しても健常児に合わせた教育を多くの日本の学校は行っている。しかし、この学校では学校全体で脳機能や障がいについてレクチャーを受けるなど先生方が障がいへの理解があったり、一般的な学校であれば第一に健常児を考えているが、この学校では障がい児を第一に考えていた。授業を見学したときも、始まる前にスクイズのようなものを必要な子どもに渡したり、先生が一方向的に話す時間は 10 分と決め、授業の途中では「brain break」というリフレッシュさせるための時間を設けたりしていた。教室にも工夫されており、椅子の高さがあえて違っていたり、バランスボールのようなボールの椅子に座って授業を受けている子どもがいたり、雑音を遮断するような壁のついた机なども置いてあった。このようにして、「どんな子どもでも成功できるように」という考えのもと、その子どもにあった環境づくりの本当の意味をこの学校から学ぶことができた。また、環境という観点から言えばフィンランドの Aalto University の環境も印象に残った。この大学で感じたことは、きちんとパーソナルスペースを確保するような環境が複数存在するということがあった。[図 1] そこでただ座っている人もいれば、寝転んで勉強している人など、自分がリラックスできる方法でそのスペースを活用していて、学習環境の重要性についても改めて考えることができた。

ここで記載したものは本当に一部であるが、今回の北欧スタディーツアーでは今まで授業で聞いていたことを実際に見ることができた部分もあれば、それ以上の学びもあった。今後、この貴重な学びを活かしつつ、大学での学びへと還元していきたいと思う。最後になりますが、スタディーツアーに関わってくださった皆様、引率の先生方、メンバーに深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



全ての人が夢を持つために

教育学専攻 2年 山下友子

この大学で2度目のスタディーツアーに参加するという事で、緊張というよりかは初めての北欧上陸に楽しみな気持ちと教育先進国の学校をたくさん訪問することができるという期待を胸に出発することが出来ました。

今回のスタディーツアーで印象的だったのは、ストックホルムで訪れた公立グリムスタ学校とブロンマフォークハイスクールです。フォークハイスクールには、“すべての年齢の人が教育を受けるべき”を基に建てられていて、18歳以上の様々なバックグラウンドを持った生徒が通っていました。現在の日本では学校に毎日通う事が出来ずに長期間休んだりすると遅れを取り元に戻れない状態になり、そして、その状態が一般的ではないという風潮を感じます。今回フォークハイスクールを訪問して、人それぞれ精神疾患など様々な理由で学校を卒業できなかった生徒にも夢を目指すことのできる環境が整っている事に羨ましさを感じました。日本では9月1日前後は中高生の自殺が最も多くなるといわれています。日本でもこの学校のような選択肢がある事が一般的になれば我慢したり焦ったりせずに自分と向き合う時間を設ける事も出来るのではないかと感じました。

公立グリムスタ基礎学校は9割が移民のため、スウェーデンに来たばかりの生徒のために今までのバックグラウンドやどのくらいの教育をうけてきたのかを把握するためにアンケートを取り、移民の生徒1人1人の必要性によって支援の程度を変えていました。移民の子の親にもスウェーデンのシステムを学んでもらおうと面談を行ったり、積極的なアプローチをしていたり等、公立グリムスタ基礎学校の訪問を通して、学校側は学校内でしっかりと生徒に学ばせる責任があるという事を先生1人1人が心にとめて先生をしていると感じました。この学校の理科の授業を見学させて頂いた際に、生徒は授業内容をすべてスウェーデンの言葉で学んでいました。ただでさえ難しい科学の専門用語まで言語を習得している事に驚きましたが、先生が移民の子だから将来成功しなくても良いという考えではなく、すべての子たちに成功してほしいから一般のスウェーデンの生徒と同様に学ばせる。という言葉に感動しました。

スウェーデン・フィンランドの教育が発展しているという事は授業で多く耳にしてきましたが実際にスタディーツアーに参加し多くの学校を訪問することで、子どもへの教育がとても大切なことであり、スウェーデン・フィンランドがどれほど教育を重要視しているのかを学ぶ良い機会となりました。この貴重な経験は今後日本に戻り教育学について学ぶ際に沢山生かしていきたいと思えます。最後になりますが、今回スタディーツアーを企画運営して下さった先生方とサポートしてくれた親をはじめとする全ての方々に感謝申し上げます。

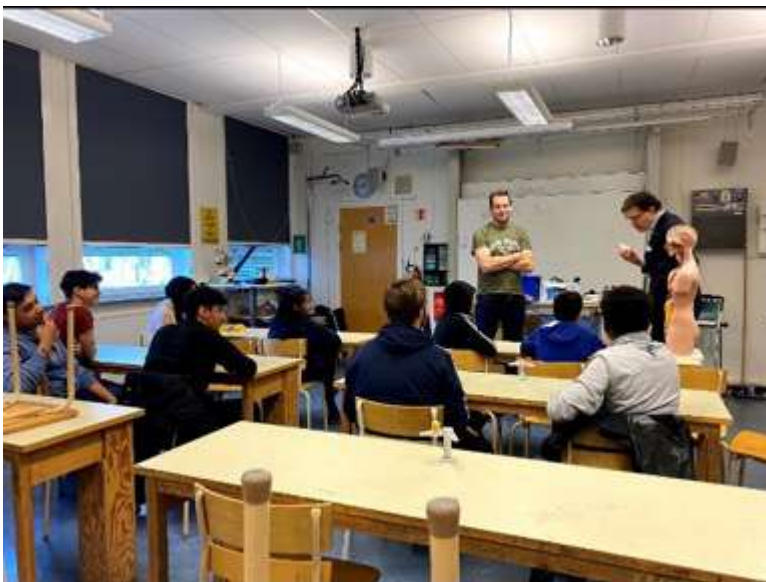


図1. 公立グリムスタ基礎学校の理科の授業

個性を大切にせる教育

教育学専攻 2年 新田萌々子

今回北欧スタディーツアーに参加をし、教育現場に実際訪れさまざまなことを吸収し学ぶことができました。また平等な教育、それぞれの生徒の必要性を学校側は把握しその子にあったニーズを提供しているということが印象的であり、どの学校も子どもの個性を大切にしていました。

スタディーツアーに参加し印象的だったのは、公立グリムスタ基礎学校です。この学校では43ヶ国の国から来ている子どもたちがいますが、学校と家族がきちんと連携できていました。スウェーデンの教育システムがわかっていないため親と面談することを大切に、子どもたちがどこまで勉強ができていないか調査し把握していました。様々なバックグラウンドを持った子どもたちが同じクラスで学びや生活を共にし、宗教の違いなどでのいじめはなく他人を思いやる気持ちが子どもたちには一人一人しっかりとあると感じました。また移民の子だから可哀想、将来成功しなくても良いという考え方ではなくすべての子どもたちに成功してほしいからスウェーデン語を使い学んでいました。

大人になってからも教育を受けることができるフォーハイスクールや、街中に図書館などたくさんの学び場があることに気がつきました。学校では校長先生、副校長先生が数名いることで仕事を分担していました。生徒は〇〇先生と呼ばず名前と呼ぶことで生徒との距離感が近いことで相談もしやすいと感じました。また高校では職業プログラムという授業がとても衝撃的でした。経済や経営でのビジネスで物を販売するなど、自動車修理のプログラムなど日本にはないような授業がたくさんあり自分の将来やりたい事を早く見つけていると感じました。初めて訪れた北欧は、街並みからすべてが新鮮でとても充実した日々を過ごすことができました。今回スタディーツアーに関わってくださった先生方や仲間たちに感謝申し上げます。



一人一人に向き合う教育

教育学専攻 2年 出口 莉子

私は、今回の北欧スタディーツアーでインクルーシブ教育を実際に自分の目で見て学びたいと思い、参加しました。

学校を視察したことで、授業や事前学習で学んだことをより深く理解することができました。どの学校でも生徒一人一人に目が行き届いており、面倒見の良さを感じました。

特に印象に残ったうちの一つは、グリムスタ基礎学校です。どの学校も様々な背景がある子どもが多いと感じましたが、中でも43カ国の母国語の子供達がいるということで、学校の全ての子どもへの対応が印象に残りました。多くの母国語に対応できる教員がいること、短い期間で多くの子供が一般クラスで授業を受けられるレベルになることに驚きました。また、親との面談など、親にもスウェーデンのシステムを理解してもらうことは、子どもの教育の大切さを伝えることができ、教育の質の向上につながるのだと感じました。学校にカウンセラーも常駐しており、定期的に教師の指導もしていることがわかりました。また、学校を視察している際に、校長先生や副校長先生などが生徒の名前を呼んで話しかけたりしている様子を何度か見かけました。校長先生は日本ではあまり生徒と関わることのない印象なので、改めて面倒見の良さを感じ、先生と生徒の信頼性や良い距離感を感じる事ができました。

今回のスタディーツアーで子供達の自律性も感じました。どの学校も民主主義の勉強になるように考えており、それが子どもにしっかり影響を与えていると感じました。学童で何をして遊ぶか、どこに行きたいかを子供達に決めさせたりすることも、子供を考えさせることに繋がり、民主主義に適応していくとわかり、日本でもすぐに実行できることがたくさんあると感じました。高校から専門的な学びができることもあり、実際に子ども達と話していると、自分の将来について意志を持っている子が多いと感じました。

このように、スウェーデンやフィンランドの学校では、全ての子どもを見捨てず、一人一人にあった対応をしていることがわかりました。このようなたくさんの貴重な経験をする事ができたスタディーツアーに関わってくださった先生方、全ての関係者の方々に感謝いたします。



幼稚園に貼られていた様々な家族の形があることを表す絵
感想文では幼稚園に触れていませんが印象的でした。

学びへの価値観が変化した1週間

教育学専攻 2年 矢野汐里

世界から注目されているスウェーデン教育の根底には、「子どもは国の財産である」という認識があることを学びました。その考えは幼児教育の段階から子どもたちに反映されていました。訪問した私立ピスリンゲン・ビヨンゴルデン幼稚園では子どもたちはなにに興味があるのか、希望も踏まえたうえで様々な本や音楽などを紹介、体験させて子どもたちの将来の選択肢を増やすよう努めていました。これが子どもにとってのバリアフリーであり、能力や才能を伸ばすためには教育の多様性が重要なのだと思いました。

スウェーデンの学校では政治意識が高いことも印象的でした。学校側が積極的に政治と関わる場を設けることで生徒たちの政治意識も高まっているのだと感じました。また、私たちが訪れたすべての学校において、自分の考えを持って誰かに聞かれずとも自分の意見を言えるような環境が整っていました。子どもの権利がしっかりと守られている一方で自分の行いは自己責任として自立を促す環境が社会に興味を持ち、考えを深めることができる理由なのではないかと思いました。

改めて今回の研修を通して子どもにとって環境づくりがいかに大切かを学ぶことができました。引率してくださった先生方や一緒に学ぶことができた先輩や友人、スタディーツアーにおいて関わってくださった方々に感謝しております。ありがとうございました。

図1：私立幼稚園のおもちゃ



民主主義と子育ての社会化

杉原 真晃

このたび、引率教員としてインクルーシブな社会・教育の在り方を学ぶ北欧スタディツアーに同行いたしました。はじめてのスウェーデン、数年ぶりのフィンランドということで、引率もさることながら、個人的にとっても楽しみにしていました。

北欧でのスタディツアーでもっとも印象に残っていることは、スウェーデンにおいて「民主主義」という言葉が繰り返し聞かれたこと、そして、その前提となる「人権」(Human Rights)への理解・人権意識でした。スウェーデンで語られたその民主主義は、一人ひとりの子どもの存在が大切にされていることを基盤にして、学校での子どもの学習について、生活について、自分で選択できる幅が広く、自分たちで話し合っただけで決定していくプロセスが大切にされていることに具現化されていました。そのプロセスは大人の求める単一の価値観に統合させるものではなく、そして単なる多数決でもありません。ここでは、大人(教師等)の支援を借りながら、子どもたちがしっかりと話し合うことが大切にされていました。日本においても「熟議」という言葉が流行った時期がありましたが、残念ながらまだまだカリキュラム、学級風土やルール等について、スウェーデンの学校で目にした・耳にした「子ども中心」には及ばないと感じました。このあたりが「文化」とそれを作ってきた「歴史」の重みなのかなと思いました。

もちろん、何でもかんでも「子ども中心」が良いとは限りませんし、「子ども中心」自体のデメリットにも配慮しなければならないので、諸手を挙げてスウェーデンの学校システムを賛美することには慎重にならなければならないでしょう。しかしながら、それらに注意を払ってもなお、私たちが学ぶべき要素がたくさんあったと感じました。

とはいえ、北欧のインクルーシブな教育を参照しながら、今後の日本の教育について考えていくにあたり、主に以下の2点を検討していく必要があると考えています。

1. 財政基盤や教育費に関するシステムの相違

北欧の学校は、無償が基本です。一方、日本は義務教育段階の公立学校の授業料(教科書代含む)は無償ですが私立学校は有償です。そして、公立学校においても副教材や給食費、体操服、遠足代等の諸費用はかかります。これらを見捨て取組だけを導入しようとする、当然、お金をかけられる社会経済的環境にいる人々(およびその家庭の子ども)は、より良い教育環境を求め、私立学校に行かせたり、より良い教育改革を進めている公立学校の学区(地価が高くなり、それなりの社会経済的環境にある人々しか住めなくなってくる地域)に引っ越ししたりすることを加速させるでしょう。まさしく、格差拡大に学校が手を貸すこととなります。

もちろん、歴史上、学校が格差拡大に手を貸してしまっていたことはブルデューの再生産論や荻谷剛彦をはじめとした教育社会学者による研究により明らかにされており、北欧の教育システムを参考にした改革をしたから格差拡大が加速されるというのは、少し誤解を生むかもしれません。一方で、財政的なシステムを変えることなく北欧の教育システムを導入すれば、意図せざるところで問題となる現象が生じてしまうこともまた注意しなければなりません。

そして同時に、北欧諸国が福祉国家としての困難にぶちあたり、少しずつ自由競争を基盤にした資本主義的な欧米諸国のシステムとの距離が縮まってきていること、教育においてもPISAの結果を指標としたGERMの影響を受けつつあることにも目を向けていかなければなりません。くしくも、フィンランドの小学校において習熟度別クラスとギフト教育の構想が語られたことは、現実的な現象なのでしょう。

スウェーデンの学校において民主主義が語られたことが印象的だったことは、民主主義への希望とともに、民主主義自体への懸念を私自身が抱いているからかもしれません。ポピュリズムやワンフレーズ・ポリティクスに対してしっかりと向き合い、より良い民主主義を追求していくことが必要となっている現在です。そのような中で、将来、市民として地域(国家も含む)を作る主体となる子どもたち一人ひとりが、インクルーシブな教育システムにおいて民主的に生きていくことで、その素晴らしさに気づき、インクルーシブな社会の形成を目指す主体となっていくことが期待されます。そのためにも、教育システムが民主的でインクルーシブなものであるということの軸を外さないことが大切になるでしょう。

2. 生涯学習社会における社会全体での子育て

私たちが北欧から学び導入できることでハードルの低いものもあることがあらためて理解できました。それは「社会全体で子どもを育てること（子育ての社会化）」の仕組みです。北欧においても、学童、図書等の社会教育の活用については有償であり（直接的な利用料もあれば、税金という形での負担もあります）、財政的規模は異なるかもしれませんが、北欧と日本との間に、学校教育ほど大きなギャップは存在しないと感じました。

日本においては、教育といえば「学校」というイメージがまだまだ強いかと思われまます。「教育学部に所属しています」と言うのと「先生になるの?」という質問が次にほとんど必ず飛んでくることに象徴されています。昨今の学校教育改革では、「チームとしての学校」「地域社会との連携」がようやく叫ばれるようになりましたが、「学校が核」となることは外されていません。コ・メディカルが医師（歯科医師を含む）を核とした諸業種によるチーム医療であることに対し、コ・エデュケーション（と仮に呼ぶとして。実際には「コ・エデュケイショナル」とは男女共学のことを指します）が学校教師を核としたチーム教育であってよいのかどうか、北欧の生涯学習社会／ラーニング・シティ（Learning City）を参照しながら、日本のチーム教育の進む方向のメリットとデメリットを検討しなければならないと感じました。そうしなければ、社会の学校化が進み、子どもたちはますます学校的価値観の中で監視される存在となってしまいます。

子どもが育つ場所、学ぶ場所、子どもの居場所は学校もさることながら、地域社会にたくさんあり、それぞれが同等の立場で連携しながら、多様なシステムと価値観の中で子どもの育ちを支えていくことは、今の日本においても実現可能なのではないかと思われまます。もちろん、そのための学校教職員の研修や社会教育への財政的支援の増加が必要でしょうけれど。そして、同質性が高い学校だけでなく異質性の高い地域社会において、子どもが過ごし、学ぶ機会が増えることで、よりダイバーシティ&インクルーシブな教育が実現されることが期待されます。

多くの教育関係者に、書物だけでなく実際に北欧を訪問し、インクルーシブな教育の在り方について肌で感じていただく機会があると良いなとあらためて感じた北欧スタディツアーでした。そのためにも働き方改革や教員研修制度の見直しもまた必要となるでしょう。

このたび北欧スタディツアーに引率教員として参加できたことで、多くのことを感じ、考えることができました（もちろん、学生の安全と学びのサポートが第一優先ですが）。ご企画くださりまました澤野先生には心より感謝申し上げますとともに、お認めいただきました教育学科の先生方に厚く御礼申し上げます。

はぐくみ、学び合う社会

澤野由紀子

教育学科のスタディーツアーでスウェーデンを訪問するのは、2016年、2017年、2019年に続き今年で4回目となりました。今回も首都ストックホルム郊外の移民・難民の多い地域の教育機関を中心に訪問させていただきました。フィンランドに立ち寄るのは2017年以来2度目で、前回と同様に首都ヘルシンキ市の隣のエスポー市を訪れました。エスポー市はユネスコ学習都市賞アワード都市でもあり、僅か1日の訪問でしたが、効率よく見学させていただき大変充実していました。教員の学務との関係で最も海外渡航がしやすい2月は航空運賃も安価ですが、北欧では最も寒さが厳しい時期です。それでも地球温暖化のおかげで今年も北欧は暖冬で、夜間に時折小雪がちらつく程度でした。日中は東京とほとんど変わらない天候で、スウェーデンでは晴れて気持ちの良い日が続きました。フィンランドでエスポー市を訪問したときのみ雨天となり、体調を崩して視察に参加できない学生が一人現れましたが、幸いなことに大事には至らず、皆元気に9日間のスタディーツアーを終えて帰国することができました。

今回これまでと違う驚きだったことは、トゥンバ高校の日本語専攻の生徒だけでなく、他校で日本語を学んだことがない生徒たちまでが、日本語のメッセージやプレゼンテーションを用意して私たちの受け入れを歓迎してくれたことです。シェルプリンスク学校では、通常学級で落ち着いて学ぶことができなくなる生徒たちが集まるリソース・ルームのホワイトボードに「歓迎！・・・あなたがここにいるのは楽しいと思う。」ときれいに書いてありました。聞けば Google 翻訳で調べて書いたということでした。

日本語のコースのないBronma・Folk・Högskolaでも、英語の授業の一環として生徒が私達にスウェーデンの民衆教育とFolk Högskolaの歴史をパワーポイントを使いながら英語で発表してくれましたが、そのスライドのなかに所々日本語で解説が書いてありました。例えば、私も西洋思想などの授業でよくとりあげるFolk Högskolaの創始者であるデンマーク人のグレントヴィに関するスライドには、「司祭、歴史家、詩人、公教育者」などと漢字で解説が記されていました。こちらも Google 翻訳を使って和訳し、訳語をペーストしたようでした。

聖心女子大学の学生も、スマートフォンの Google 翻訳アプリの文字認識システムを器用に用いて、スウェーデン語やフィンランド語の掲示物の内容を瞬時に解読していました。IT ツールの進歩によって若い世代の外国語学習のあり方も急激に様変わりしていることがわかりました。トゥンバ高校で日本語を教えているアールベリエル松井先生によれば、最近では日本語弁論大会などのスピーチ原稿も Google 翻訳で和訳し、発音やイントネーションまでアプリの影響を受けるといったような例もみられるそうです。

それにしても、日本語を学んだことがない生徒たちが、一生懸命日本語を調べて、このような準備をして私たちを迎えてくれたことに、感激しました。



シェルプリンスク学校リソースルーム



Bronma・Folk Högskola英語の授業

また、毎回のことですが、北欧の先生方は学生たちを心から歓迎してくださり、とくに教育学を専攻

している学生であることがわかると、限られた訪問時間のなかで将来教育者になる場合に役立つような様々な教育上のノウハウを伝えようとしてくださいます。学生からの質問にも丁寧に答えてくださる姿に、常に多様な児童生徒一人ひとりを区別することなく、寄り添って教育している先生方ならではの、の熟練を感じます。

2015年の欧州難民危機以降、スウェーデン、フィンランドともに紛争地帯から心に傷を抱える児童生徒が増え、学校の教員が学童保育士、ソーシャルワーカーや医療機関と連携しながら個別の状況に応じた支援を行なっています。とくに言語教育には就学前教育から力が入れられており、公共図書館でも放課後にボランティアにスウェーデン語を習ったり、宿題を手伝ってもらっている青少年の姿がみられました。家族から離れて一人で戦地から逃れてきたティーンエイジャーの難民には、キャリア教育や性教育なども特別な配慮が必要となっています。学校現場は大変な状況ですが、これまでもインクルーシブな教育を行なってきた先生方にとっては特別なことではなく、むしろやりがいを感じながら取り組んでいる様子が窺えました。

このように教え学び合う生涯学習社会がまさに実現している両国から私たちが学ぶべきことは多く、今回も参加学生一人ひとりが短期間の研修で得た経験と気づきを大切に、今後の自らの学びや生活の中で発展させていくことを願っています。



スウェーデン：グリムスタ学校



フィンランド：オタニエミ高校



ストックホルム市立図書館にて。聖心女子大学で何度か講演をしてくださったことのある生涯学習・民衆教育の専門家、ケンネット・アブラハムソン先生（右端）と

おわりに

冒頭でも述べたとおり、スタディーツアーから帰国してからわずか1ヶ月の間に、COVID-19のパンデミックによってグローバル社会の様相がすっかり変わってしまいました。3月以降聖心女子大学のキャンパスは閉鎖され、卒業式も入学式も行われずに始まった2020年度前期の授業はオンラインで行われています。予想もしていなかった事態に対応するだけで日々が過ぎていき、先の見通しも立てられない状況ですが、教育学科で大切にしてきた国内外におけるフィールドワークという学び方がしばらくできなくなるであろうことは予想できます。それでも、私達は在宅でオンラインで繋がることにどんどん慣れていっていますから、このツールを使って世界の学校や教育関係者と繋がるハードルも次第に下がっていくのではないかと思います。スタディーツアーに替わる革新的な学び方がみつかるとなるかもしれません。

世界各国に自由に行き来ができる日が一刻も早く戻ってくることを願いつつ、2020年2月上旬にスウェーデンとフィンランドで得た豊かな学びの成果を、現在の限られた環境のなかで可能なかぎり発展させていきたいと思います。

この困難な状況のなかで、現地でお世話になった先生方や児童生徒の皆さまの健康と幸福を祈念いたします。

澤野 由紀子

List of Participants

Yukiko SAWANO (Professor)
Masaaki SUGIHARA (Associate Professor)

B.A. Students of Department of Education

Ako TAKEICHI
Nana SHINOMIYA
Mona SAITO
Mami SATO
Momoko NITTA
Shiori YANO
Riko DEGUCHI
Mizuho NAGAMINE
Mayu SHINADA
Ayaka WATANABE
Yuko YAMASHITA

University of the Sacred Heart, Tokyo

発行年月日： 2020年5月5日
編集： 澤野由紀子
表紙デザイン： 四宮菜々
発行： 聖心女子大学現代教養学部教育学科